近代欧洲之文藝

（卅八年[illegible]稿）

本間文庫
文庫 14
A111
2

卅八年級

近世歐洲文藝概観

（上）

文庫14
A111
2

位

近世欧州文芸概観

（明治卅八年十月より早稲田大学文科二年にて）

緒論

諸君、此講義は初め學年に近世欧州文学殊に十九世紀以後現在に及ぶまでの列国文学の概畧を、お話しするものにする積りでありますが、能く考へて見ますに、どうもそれでは私も満足出来ませぬ、諸君の方にありましても、或一二の書を読めば、それでも用は足りるのですから、今少し精神的にし

たいと思ひ、遂に方針を少し変更致しました、

三年でやります美学と近世英文学史、是は科学的哲学的研究即ち学問を学問として、ロジカルにエキザクチチュードをも併せ求むべき研究とし、半ばは

子一年の文学概論は主として外形的に文芸の概略的知識を修得させると云ふ形ちに致しますが、六二年の近世文学概観は少しく拡張して文芸全体の観察とし、以て明治近代の思潮文明を文芸に見ゆり

大方に概観するといふ程にしたいと思ひます。（即ち題を改めて近世文藝概観と改めます）
蓋し三年の講義にある学理的精確の
研究を共にし、二年の講義で出来る二三の評論的
文藝評論的の、必ずしもシステマイズされて居ない、
研究をなし、以て私の考及び考へ方の主体
を両者の発揮し得る一團の思想系をなす
~~結果~~やりたいといふ考です

(4)

勿論文藝といつても重に文學を中心として歴史的にも全般の近世文藝の發展流動の事跡を述べたいとは思ひますが、併しこれは私の專門外であり、追行はれてゐるといふのでもありませんから、別に引例文學史若しくは文藝史として特殊の見地から考へるといふ迄でもありません、寧ろ全體の近世文藝御紹介し此文藝史論的引例として少しく精しく文學史的に引べて見たいといふ次第です。

(5)

さて、ヘーゲルの美術論に美的理念の歴史的発展を三段階の
ヘーゲリアンで三段に分けた見方があります。之れは例の
文藝を凡て理想の有形化されたものとして見地から
分解された論ですが、第一が象徴的時代（シムボリカル）、第二が
古典的時代クラシカル、第三がローマンチック時代で、
第一は東洋的な藝術美術に多く現はれたもの

(6)

で、未だ以て完成せざるに早く已に形に現はれるから、内容が形式に勝ちすぎ、只上辺に触るるのみでつまらぬものになるとする文藝、其の第二は上世の最も文藝で其形共に調和したもの即ち又云へけることこれは内容も充実したもの、第三は進んで内容が形式に勝った形で近世の文藝がこれであるが、而して完全な文藝の形はクラシカルで前後の二者は文藝としては不完全のものであると云ふ思想です。

(17)

私は此見方を出来るし之を詳しくし排列方法の変更を加へたる
上、此見方点（ポイントオブビウ）から先づ大体の西文藝思潮の
漲落を見ませう

前回芸術の三つのメソッドを挙げまして一、Symbolic 二、Classical 三、Romantic といひました、前者即ち Symbolic といふ語は今日我々の思議するとは違った意味に用ひて居ります 古代の東洋は美術の果て主へ一定の用ひ方をし味即ち称號一寸違った味のあるけ語で解は説明せんとしてつかは則ちまして、Symbolic と云ふ語は今日では却て一定が加へ挙げた Romantic 即ち恐ねるの外形よ勝って様式の美術に用ひ居られております例へば中世 Gothic とつけました即ち十字架を描いて直ちに基督を標示する、それは基督と思ひなは到底

(9)

大きくて幽玄なる外形を以てしても此世の材料ではとても
尽せず。切れなりかた、單なる簡單に十字架を描いて、それで
満ずして單画かつとしても、先づこんな意味を感じてせう。ロダンテ
をまたまたとしても、[illegible]
たゞひは即ちこそせう。又[illegible]せしめ遣つていらるゝ。ヘーゲル
のこ[illegible]似たる意味も即ち[illegible]とでもいふべき意味に用
ひますとしても、言ひかへれば、尺ふきすこきの[illegible]
詩手が直ちに其文藝のよする詩形で事とする
味でも此語を用ゐるとしても、或今の場合せ ヘーゲルのと
子弟に直ち[illegible]思のも味が含まれてゐます

詳しくいへば、ヘーゲルの所謂、内容の不足の為に外形が勝つて来る、然るに近代の所謂、内容即外形と見るが如に外形ばかりでもよいとするのであります。

序にいひますが Symbolism は東洋的芸術といはれるもむしろ伊太利から仏蘭西へかけての殊に近世の芸術より多少の痕跡を認め常に存してゐます。

上古のやうな所謂 Symbolism と云ふ語を代ひは内容余りあつて外形の足らざる文芸と云ふ味に用ひまして、上古の如く却て近世の一種の芸術を見てはめ試みやうと思ひます

次に Classical なる語も近時の用法例は内容外形の調和と
いふのではなく、是が却つて一ヶの Style となつた即ち
内容の缺けて外形の勝つてゐるものと見られてゐます。Classical
即ち [illegible] と解せられるのが普通です、随て茲で
は一ヶが擬古の意味に用ひられるのに対して、むしろ賤下の
意味を含んでゐます 今茲では此の Classical なる語の
係が違ふので、十七八世紀の仏蘭西中心の文藝が古典
尊崇の結果 其外形のみを模倣して遂に形式的に陥つた
とみるのですが必ずしも一ヶの用ひ[illegible]めく

直ちに基本えてる希臘羅馬の文藝を指すのではない
随て Classical 即 Formal といふも此等の古典文藝が
Formal であるとのではないのです、希臘羅馬の
文藝が果して ヘーゲルのいふ意味で 内容と外形との均衡
合ひを得てゐるか否かは別問題として 兎に角用
諸例は右の如く Classical 即 Formal と見るが近
世紀でせう、
後日にいひますが此でヘーゲルの シンボリカル と名づけて意味

(13)

即ち外見よりみればかけ（凡て）内容をとしたる（意味）を
シェリイは Realist といふ前者を挙げて Idealist を対照せしめ
奔放文様は異なでありといつて居ります
強りに Romanticism と云ふ語、是れは大分面倒な語です。
三年の併戦で片附けられ Beers 氏の History of English Romanticism in the 19th Century
に稍精しく論じてありますから引いて見ますと、椿岳は
先づ仏の批評家 Brunetière が其の文学史で
（之を）抒情主義なり自我の発射なりといつて、上同じ仏の有
名な女文豪 Madame de Staël が之を異文主義に対する

(14)

其客觀主義、或上古主義に對する中世主義、即ちこれ
に對するローマンチツク也とせらるを是認し之の名を奉け、要するに
Romanticism 其の起原の語より見るも其の通り即ち中世に遡る（即 Medievalism 也）
回顧する思想也と～～されたるなり
又思想の特徴を數へて、

Emotional stress, sensitiveness to the picturesque, love of natural scenery, interest in distant times and places, Curiosity of the wonderful and mysterious, subjectivity, lyricism, intrusion of the ego, eager experiment with new forms of art.

算也とせられたれ

(15)

「ヘーゲルが内容の外形に勝つて文藝といひますのを、若し其内容と云ふ情の謂で、其外形とは知識的標識の謂ひであるとすれば、前に列挙した ~~界或…~~

~~抒情~~、抒情的なといふものと相通ずる意味になります

が、理智ならぬ者で、そうして其外形的… 〔外形の材料の綜了量もよほど少く〕 …時には却て

標記的みなりはしまいかと思はれます即ち Romantic と云ふ称 〔近世代の説明〕

は立場がなくなつてしまいます」

それで私は此講義で先づ上来述べた ~~…~~

新しい用語例で、クラシカルと云ふ語と ~~…~~

対照するローマンチックと云ふ語を用ひて此講義

の範囲を明にします、併し學者と世上の如く能ふの
ことを味ある語を用ゐるのは面白くありませんが、歴史的見る
所の文藝が自然と傾斜してゐる事跡を出して、
此のロマンチックと云ふ語の意味有すべき意義を
求め出しても見ませう。甚だ異なり
所謂ヘーゲルはロマンチックと云ふ語を基督教文藝の
凡てに充てるのでありますが、近世殊に
十八世紀の末から十九世紀にかけて起った思想界に對する
名であります。故に世界にしては なりません

そして斯やうな意味でのキリスト教は凡そ下の三様の意義及び意味の事実を有して居ると信じて居ります
第一情緒的、第二内省的、第三超人間的であります
次にこれらの事を述べませう

(?)

前回の講義で十九世紀ローマンチシズムの直意既に述べ情緒的、第二内容的、
第三詩人個人的の三面があると云ひましたが此三面の由来を歴史
的に尋ねて見やうと言ひます
希臘の文藝 ~~[illegible]~~ 擬古神話的 ~~[illegible]~~ 的とも云ふべく Homer Phidias Aeschylos 等には思想と云ふ[illegible]
三戯曲家等の作を通じて此分子は大に人間化し行き更に之を究に
中世其の宗教時代は神話的のものを中心として
終了に至り全く自然の人間の意志と共に人間的になる所謂文藝復興時代に至
んで自然科学の勃興と共に神話中心の傾向は代り、又中世に至
んで殊に知識が進み信仰が之れに伴ふ機会と共に世界全く基督
教中心の世となり宗教的となり宗教的[illegible]時代は去り

5

(19)

宗教が文藝を征服し使役してゐたのです。要するに社会活動の中心は宗教にあつたのです。史的出来事では十字軍がもつともよく此社会状態を示して居ます。然るに芸術は遂にさう僧侶までも屈従して居る譯に行かず頭を擡げ来つてDanteの Divina Commedia にこに文藝復興の曙光を示して来ました、けれども尚ほ全体中心は基督教で其作の材料は基督教、芸術は宗教を離れて言へば依然基督教に依つて生きて居る文藝で字気味でした。十六世紀に及んでの Raphael Titian Michelangelo等に至つて依然此状態は継続して居る

けれども一方には史家ではあるコンスタンチノープルの滅亡、印刷術の発明などよりか學識の進歩は輕々として止まらず學識が頭を擡げる迄宗教ありけれども尚ほ基督教的感情に重きを

紀元来らざるを得ない。けに基督教となりし基礎は實で
かくて経て超個人的の文芸は殆ど其領域を狭められて来る
即ち一方にラファエル等と共に他方にはルーテル等の宗と已に比
学問復興に伴ふ強みを代表する者同じく近世の後半
英国に於ける出づるに及んで文芸は始めて全然人間に還れ
るの観あり。勿論此の網中にも或程度まで依然中世的超自
然的宗教的思想の存するものもあれど大体に於て人間的となすを
は脱かなり。文芸は宗教の奴隷となりし状態より脱
去したるは史上のたゞ僅とみるべきである
斯くして知識が勝ちて行くと共に文芸の範囲中身も次第に人間に
下りて来る。純粋中身は現世に於ける冷かなる批評

う論判、実證となせしをなすと共に一方、（冷めたる）感情を補はんがため、

言ひ換へば藝術の形を存續せんが為に外形に工風を凝らすに至る

（英）十七八世紀の英仏を中心とした文藝は此時代に実へ入りして

組織的形式文藝（佛）Intellectual formalism ともいふべきものに

なつてをりました　Molière, Racine, Corneille, Dryden, Pope, Swift 一寸之れを

代表してをります　勿論此十七八世紀の形式文藝の作品は直接の

理由はラテン模倣といふことに由るものを要求のよりしてあるとしても断

守なることを思ひつくことなのが、根本に断様な工風はかせ得ざりし

所から認識量の勝つ位置を乗じてあるのであります。

ですから此れに対する自然の反動は、（十九世紀初めの）其十八世紀が知的なるの理由で

対しては時に情緒的なぶんきを許し、又直形式的な[illegible]るに傾
ある時は観念内容的なぶんきとも呼び直ちに個的なに対しては
個人的乃至個自然的なぶんきを分子群として結果に終り
ませう
十九世紀のローマンチシズムと浮笑呼ばれる思潮は実に此等の凡てを
含んで居ます。此に此三大[illegible]目が更に十九世紀中に進行し変化し
分派し行った跡を見ますと、一層此等の諸思想が確になりませう

前回の講義に於て十九世紀の初に至るまで此ら勢力生じて来た其由て来る
情緒的、内容的、人事的の三傾向の潮流を述べました其中に此等の三傾
向は又十九世紀に於て自ら種々の変化を来しました
第一情緒的となつては其の極端に於て十八世紀文学の知識的なるに対して
自然に 純に
紀伝的傾向で表現 例へばワーヅワース、コールリッヂなど、詩歌は感情の
流出であるとのものであると叫んで独意の所であるが併しながら
之れが段々其方面に行き過ぎて センチメンタリズム即ち過感的のものと
なりました英吉利の方でのバイロン、キーツ、独乙ではゲーテの Werther と Leiden
など、Werther 仏蘭西では Chateaubriand など此傾向を代表すべく
(23) 其れから 乃至特殊 に至れば非常に極端な傾向に対する非難を生ずるに至りました
(24) 又第二の内容的即ち十八世紀の外形的な点のに反して

たゞ仏国は仏のRomanticism英のLake school等の自然と云ふ事を標榜すると(よし其の浪漫的までに解せらるゝにせよ)異なったものと存ます
ござりまして此~~[illegible]~~の思想の~~[illegible]~~連絡を見るには現実的
Idealisticなる独のSchiller、英のShelley等があります而してShelley
のものは此の部に入ると共に前の空想的の部にも入りまして
此等の思想の根本は~~[illegible]~~之をローマンチシズムと云ふ一語の下に
総括せらるゝ[illegible]丸で違ひます丸混じて称して居りますから
[illegible]と区別する事は出来ないのです又此現実的の傾向の小説の如きも
見ることは論理的Scientific~~[illegible]~~なるにGoetheのFaust
のものがありません(宗教的Religiousなるに Tolstoiのものがありません)

~~[illegible]~~
問題的~~[illegible]~~
Problematicなるに
Ibsenのものがあります

まとめた上で示すべき一つの現象は最近十九世紀の末までを画すべき[illegible]
一大思潮即ち写実的 Realism の傾向でありますが、是れは普通右
のロマンチックの傾向に反抗して起つたものと見られて居りますが、
是れは却てローマンチシズムの当然の結果の一つ[illegible]即ちロマン
チックの連続であるとも見えます。即ち文学上では見えて
順に現れた結果でせう。又之は歴代文藝の思想の発達が示す如く
也から感情的は未だ人のが次第に科学を経ると共に知識の不
断の進歩に追ひ抜かれて知識的になつて行く其の結果何時とも
なくローマンチックなものも知識の分量の多分に這入つてくるものに
なる。然には知識の分量の中で出来上つてやられたなる代
に於てまさしく又動ぐ抵抗するといふのではなからうか。現に仏蘭西
の Baudelaire. フロオベエル等の自然主義 Baudelaire に就ても彼の名

の伴奏は（ローマンチシズムの）は之を調和なりと見他は（ローマンチシズムの）は之を連続なりと見て二種の分離した見があるやうです　私はむしろ之をローマンチシズムの連続と見たいと思ひます　其の理は之の調和を青年が探求する　自然と云ふ語が已に之れを含んで居ます　今御ローマンチシズムには自然と云ふ中に自然の界と云ふ意は毫も含みませうが、同時に人為に対する自然と云ふ意が義で居る、言ひかへれば同じく人工的形式を排して立つ要素即ち内容的とする材料をして直ちに自然を其の儘に写す、人工を加へぬ様な思想の現れて来る事を模写しそれは之をローマンチシズムと云ふはローマンチシズムを内容的即ち人工的と観る一大思潮の自然の境界とする事を得る所以です、而して古典主義とは同じく連続の間にあります、何れも中身内容を占めんとする係しながら知識が勝って来て居るから、之れが知識的になり易い、此の風物を示して居るのが此自然主義である

実主義では仏のDaudetの如き英の近代派
又は彼の畫家メンチエル等の如き是れであります此等の寫
実主義自然主義は更に下つて科学的になりました例
「ば日本古典学的、歴史学的、社会学的、心理学的と云ふ風です
之等はすべてに精しくは述べません
次は第三の抽象自然的のです

(28)

前回までの講義で、十九世紀のローマンチシズムが主情感情的、第二、内容的、第三超自然的[illegible]とか云ふやうな意義を含み、第一に其の第一第二が更に変化し行くといふことを述べました。

今回は其の第三、超自然的な傾向が如何に変形し行くかといふことを述べませう

其の前に一寸一言前回の講義を補つて置きたいのは Naturalism と Realism 即自然主義と写実主義との関係ですが、茲では二者を同義に解します[illegible]唯写実といへば已にシェークスピアにも見えて居る如く古くから認められて居る傾向で、其の両者の内容は種々になつて居りませうが近世の文藝に之れを当てはめますと、就中英国の小説[illegible]で[illegible][illegible][illegible]などは[illegible]に於ても

[illegible]ます。而して之れが[illegible]に又動いて起つてのではないかとは

卯であります。夫のDickens に前に[illegible]の前記高尚とすべき地位にある
女作家Austen の如きも唯自分の熟知に業の至で書いたと見るもの
が世に行はれたに至ったなのであるし Dickens みつかむ[illegible] の
ロマンチックの派に属すべき歴史小説も之を見て別にロマンチ
シズムに反対したとも撥擬ではなく Dickens に従ったとも Kingsley
Stevenson [illegible]可[illegible]むしろロマンチック派に属すべき人々が文界の
半面をも解せしむべきもある。唯此精神を解釈すれば現実
をありのままに正直に意になったものです。而して一方仏蘭西に於て
自然主義も此處に於て帰一し ラスキン一派の唱へた説も茲に帰
一して来るのである。而して此自然主義の極端に傾いた説は却って明白に
ローマンチシズムの連続である。斯やうな干係から此二つのものを

(30)

茲で此問題の見地として取扱ひます
さて第三の超自然と云ふ点は、コールリッヂの Ancient Mariner 又 Christabel の如きが之れを代表するもので[illegible]の傑作です すべて[illegible]の部に属すべきもので
超自然ではないが超現実と云ふ意味で、即ち何故に中世に還るかと云へば、そこに一種の不思議な非現実的な夢幻のやうな味があるからです 而して中世主義の好代表は英の Scott です 其の[illegible]騎士的歴史小説となります
（即中世主義も）
以上を結論としまして、以下英國を除く[illegible]の文藝史記
中世文学の変遷を極端に概説しません

第一 独乙

独乙の近世文学は英仏のそれよりも少しく遅く始まります。由来独乙は近世に於ては余り大した文学は起らなかつたといつてよい。小邦分立して国としてのまとまりが固定して居なかつたからです。殊に十八世紀の上半期までは独乙では言語其物すら佛語が尊ばれてフレデリック大王の如き仏のヴォルテールを1750年独乙に招いて此王に寵愛せられ宮廷に出入して其時代は独乙は只兵隊とのみ言語文章は凡て仏ランス式と言つた[illegible]となる位です。

然るに十八世紀の後半から国民的意識が漸く覚醒するに於いて来て茲に新文芸の端を開きました。されば独乙文学の特色の一つはまづ之が地域国として一層統一を保たせる国民文学となつた事です。

(LET 1861)

甚しく文学者の説を判断し批評、其の標準となるものまで
当時の批評の重なるものといってもよく従て自分の眼を以て見る事は
て排斥せられる Lessing 自分の批評の根拠を高めることより集めて総説せられる
[illegible] Klopstock ~~[illegible]~~ などというのが例であります
而して純文学は思想界の中心となりロマンチシズムに至る端緒を
於て最も己れの出来るのは一つは大の Sturm and Drang
即ち Sturm and Drang 〜 みは Sturm and Drang で 六十年前後に起って
一つのムーヴメントでせう 之に先って出た文学者で重なるものは
Klopstock、Lessing、Wieland、Herder 等で此等の人が起ってローマン
チシズムの先導者です

Friedrich Gottlieb Klopstock (1724–1803) 独乙近世文学の夜明けで其の詩の[illegible]最も名高いのは "Messias" (1748–1773) と云ふ基督の生涯を劇にして長叙事詩で Milton に私淑したと云ふことです 又後年 Goethe等の踏んだ ~~[illegible]~~ Sentimentalism の気は早くも此人の諸作に現はれて居ったと言はれて居ります 然し自由思想を宗とする所の ~~[illegible]~~ 意味でローマンチシズムの先駆の人でせう 又了一つ此人に重要なのは当時廃止して居った独逸の自国語で大作を物して其の独逸の確立に加力したと云ふ点でせう

Gotthold Ephraim Lessing (1729–1781)

ヴィーランドは[illegible]わかくば Lessing の後なれど勝利の前に[illegible]
其は Christoph Martin Wieland (1733–1813) はクロップストックと同じ
く英文学の影響を受けし人にて即ち人は如何の路を辿り
て其 Sämmtliche Werke の路を開き Die Oberon を作れる最後
作とせられ即ち同じく[illegible]月経の方面に於て日本にて日に不
水くらせ

レッシング Gotthold Ephraim Lessing (1729—1781) は Sturm und Drang
に先つ文星中最も大なるものにして戯曲家として又評論
家としても秀でたり 彼は [illegible] は牧師の子
にして始め神学に進学を修せんとせしが遂に文学者となり
多く劇場又実に劇曲家たらんとせしが実地を知らざるべからずとて
自ら俳優の群に投じて研究する所あり 1767年 Minna von
Barnhelm [illegible]
[illegible] Tellheim と云ふ士官が Minna と云ふ少女と
[illegible]
[illegible]
[illegible]

(45)

の時代物のごくについては四場仕組みより[illegible]所出して大衆に示し
作られし真なるは作家の定物能出が芸術の本とましてやものの世
されども世が好ましもしくは江戸歌舞伎を[illegible]として流れし如め
[illegible]作る[illegible]新劇が[illegible]此作[illegible]流れ[illegible]
新劇[illegible]
新しい作が起こる新劇の祖となりし之を目的として外に起こしの国民
的の精神が民族的の語で西洋にも必要ならざるを示し[illegible]継ぎ化さる
ものを振興したものです後半には指も[illegible]要[illegible]の大事
く評けるのであって外に[illegible]の[illegible]を[illegible]伊太利を評る
[illegible]新劇、[illegible]に[illegible]
[illegible]として実家[illegible]劇等も[illegible]也 又[illegible]批評家として仕

(46)

劇壇に貢献する所多く ハムブルヒ劇評 後世をなどしたることにも大なる
せりされど其大論文 Laokoon が最も[illegible]たるものなり
彫刻 ラオコーン像に就て Geschichte der Kunst の
中に Winckelmann に[illegible]を論じつゝある其他時代を画
中に彫刻並に絵画等の事を説けり
せし大論文なり 他に詩もあれども見るべきなし

(ヘルデル) Johann Gottfried ~~[illegible]~~ Herder (1744–1803) は詩人としてよりもむしろ
論文家として他を刺戟するの力ありし人 (セゲー[illegible])
其人の刺戟に因りて説出せしもの 批評の方面は哲学宗教
文藝の有らゆる方面に於て多くあり、其に Fragmente zur deutschen
Litteratur、及び民族文学談話の書を上げしことも尤も著し。
Ideen zur Geschichte der Philosophie der Menschheit と題する論文なり

~~尤~~も至るなり
又此時代に於ける男はカント（1724～1804）の書くところである
とが如何に重大の事件であるかは言はずして明であらう。此の
此時代の主なる社会の文藝史を研究せんとするものは哲学史の
に必ず一通りは目を通しておかねばならぬのである。
そして其の時の思想の揺れて乱れたのが所謂 Sturm und Drang
で1770年代より当時の青年の Goethe も当時余
真面目に研究せられた一の思想界の革命運動です
但し此の大運動の本部は仰て独逸に臨で世に害を
与へたやうであるが併し同時に甚しい人を刺戟して思想の変
革命に力を添へたのは否定の出来ない事であらうと思ふ

(48)

Kraft-genies = rare geniuses

一群の青年若い[illegible]文学者が起って一切在来の約束を破棄して新生命を呼吸しやうとしたのを表現しこれを文藝の上に唱(国)へることは善かったが、其の余弊は過ぎて実り道徳の上に及び全部の放縦生活を以て一切の道徳規律を打ち破らんとしたルーソーの自然に還れの風気を中心として突進したものである。而して凡てのものを新機軸によって成さんとする、非常の独創心に富んだりする人々を、Original- and Kraft-Genies と呼んだ。それで此派の一人 Maximilian von Klinger（1752–1831）が1776年に (Friedrich) して

Sturm und Drang を題する悲劇が即ち此派を説明する

(42)

ものであつておけれども此の時代を即ち Sturm und Drang と
呼ぶ人もあるのです 此の時代は殆ど二十年ばかりの事
であつて此時の作たる[illegible]の論男女の戀を主として暗壊の気持ち
腥風吹くの気味であつて非常に猛烈な批判嘲罵も[illegible]、
大手を振つて行はれた時代の個人主義、忠孝主義、歴判主義などや
うなものが主なる傾であつた
~~此時代の特徴の著[illegible]~~
此の時代の特徴を一言に言へば国民文学の非常な著
しき進歩であつた

ゲーテ Johann Wolfgang Goethe (1749–1832) は非常

Schiller 及 Lessing の後に第一に数へ出づべきはゲーテ、シルレルの二大

文星で言ふまでもなく独乙文学は彼等二人によりて華○はれるので

あるさて

右の Schiller 及 Lessing の時はまだ二十歳

父は Kaiserlicher Rat であって

厳格な父の管轄の下に

極く様えなる中央でありましたけ人は非常の早熟の人

で最

沈静な△

ゲーテは十四五歳を学生として

母は婦人で彼女は性律を讃め[illegible]か

想像力を以て富める

彼自は文学の方面であって又其出来た文学者は七才頃

年の頃人より勝れた隠れた趣味が多く文学趣味を以て人

に讃嘆する様なものもあつたりした 彼の少年までの生涯は

自記の Aus meinem Leben, Wahrheit und Dichtung の中に見えて居ります

（米訳 自伝 あり）

(51)

しかし真の後の少壮時代はこれもまた当つて失敗したあこがれ程の
理由もあつてせうか見て用ひ別件の話すのよかりし もつておもと
思の完成した青年であらういです、女はLeipzigの大
学で陀々が[illegible]容貌は新しいし、金はあるし、自分は人生知らし 陰的
でながく感情は強して此の脚件に引ずれたすべき、あらかやうてをは
試みこれのらしい 此等の不放律なる件は彼女の健康を害して
一言にて簡言すればやる青年時代の快楽を極めつくしたもの（後に中定）
ライプチヒをさつてから父の命令をやらせやうとして正規は中止
しなければならず、更にストラスブルグの大学で健康を回復の後やつとされた。
彼らに伝によると此時代のゲーテは中に熱する[illegible]思想
旧の書をよんで全体に[illegible]熱中していて自ら信ずる所を、ゆく[illegible]
に一種の自覚心の覚醒されしかのあく[illegible]

(今2)

内解れた事向上の精神を発揮し来たつて居ります
是が彼の二十二才位のすぐ時に彼れが再び去ても後に言ふて居つて
実験ハダリオ十才位まで[illegible]けれ共それは氏
去る時代の要還と云ふ事が彼れを真に研究せんとする
にあるのみ解する面白き一点になりませう即ち去る時代の前半は
単に[illegible]な文学史的快楽主義時代で併しながら之を究極した
後に来るのはもつと理想に向上すると云ふ風の傾向になつて
来ると云ふ其の具体的[illegible]ですそれでゲーテは全体に動揺
ではあるが何時でも自分の好きな方へばかり進んで居つて
彼れが文学者と云ふものには[illegible] Herderの影響が與へ
力あつたとしても之です[illegible]へルデルは[illegible]次に来る[illegible]
ゲーテが[illegible]的になつて夫れで哲学上文学上の意見などを[illegible]

するが如く他の民歌の様にすぐれたもので有ます（之はヘルデルの目にも讃述）又ホーマー、セークスピーヤの趣味も亦此人より始めて推薦せられ遂に之が愛読者になつたといふ事ですゴールドスミスのヴヰカー〔ウエークフヰールド〕なども此際かれの愛読書の一つであつたさうです

外に即ち当時の[illegible]運動さるローマンチシズムを紹介（此方面に於ける先駆者）したのもヘルデル〔ことを記念せし〕外にゲーテの生涯中には其[illegible]をした婦人で其作中に這入つて居る名高なる女が幾つかありますが之のうけ際わ去しした人〔[illegible]〕とした婦人で如何なる点でか其妻は遂げられずに了つたが併し終生其方の心の底に好ましき残りほどの完璧であつたらしく婦人は其後終生独身で過しました

ゲーテは即ち彼の傑作に入れた〔[illegible]〕中の女主人

然るに Marguerite として此婦人を描かうと云ふのです 然るにゲーテ
は経験も沢山も法律で~~年業~~
しまひ已を得ずして Weimar へと出て行つて実地俗事に従って
が自然的で自分を救ひ出すやうな気でやつてゐたらしい 随
て文学への傾向はいよいよ強くなつて来て而して此の作
品なる件は即ち後に Die Leiden des jungen Werther の主
人公なりと存じ Charlotte Buff と云ふ婦人に恋をなし
たとなすのです 婦人は他の友の Kestner の許嫁の女であるか
ら其望みを遂げずして即ち失望のあまり此地を去ることになつて
とどのつまりです
帰りて今度は Faust であって今回年に出したのが即ち Götz

(55)

「Götz von Berlichingen」と題する戯曲で世の失敗せる十六世紀の勇士は
のあに封建制な[illegible]の壊れゆくを概し之れに反抗せんとする
強い人物の人で之をゲーテが材として其周囲に当時の訓
諸 Sturm und Drang の気を発足し
理想吹き込み掛けまり活気横溢する北
を描き併せてゲーテみづからの少壮時の生活の影を見せしく
革命的の作であるのである即ち Sturm und Drang
時代の人々のゲーテは最もよく此作によって
見るべきと共に又 Sturm und Drang 甚しく最も好代表の —
作せでせう
後に出づるのが即ち Die Leiden des jungen Werthers で

(56)

政治 Sentimentalität の最好代表文学の一つであり甚だ高貴の文学
ですのは非常のもので情熱の火のもく世に隠れてゐるとふ事で
す。故アヘンデル心を動かしくのは皆に死てのみわふが全義
なのでありますが。つまり如何に此種の精神が当時の合
理に偏って居りましたかがわかります三ヶ懸念を当時の政府
の国精神界の個人的状態をありのが想像して眼
にみえる心地です
政で1775年はゲーテが隠生で恩人へ Werther の国公子
Karl August 好意で Weimar に移り付は従えて
付地をして長く世界文学史上の名所の一つにしたのであ
ります 此1775年までを青年ゲーテ 生涯 第一期と称し

(57)

一 まず即ち精神上には Sturm und Drang のゲーテ、Sentimentalism のゲーテ
であるのです
之は第二期に入ります

(58)

(いおもに裏)

ゲーテが生涯の第二期は1775ワイマールに移居してからですが此の時も紀元に
於何事も他から邪魔するものもありませんが僅かに此時ゲーテの此辺の生
涯は一連続であると云って別に申しません。ゲーテは此後二十年ほどの
ゲーテは寧ろ其の幸福なる生涯を楽しんで居るので若き公子等と共に
も交って宮庭にゲーテは公子が遊戯的で宮庭の中も賑やかで芝居なども色々の
事をやって劇場が焼けてからは野天でやったりなどして宮中の男女
皆な役を勤めるなど好ずで其時分に（まだゲーテが劇場監督であった時分）ゲーテは伊太利
を旅行した中にも伊太利旅行記の如きは非常に面白いものでありますと
なさそうですがゲーテの長い生涯の中では伊太利行きがまた非常に面白いのが
あります。作は希臘式の芝居で Iphigenie auf Tauris 又 Egmont と云う
戯曲。ですが Faust も伊太利旅行中に書きかけたと云うことですが
すべてゲーテして Torquato Tasso と云う／ク次第にシラーと云ふ人と初めて親交
戯曲も此時に出来ました

(59)

を打するまでになって将来死ぬに至るまで新しい文学的にも互に扶け合って
枕て文学の花を千紫万紅咲かせるといふものは ~~[illegible]~~ 文芸史上の
奇花になつて居ます。而もゲーテがシラーに初めて会つた時は[illegible]年後であつて
が此時はシラーは既にヴイマールに甲代の友人と[illegible]来て居たので
ゲーテとは之を殊に重んじなかつたが、子のはゲーテとシラーとは行き方が違つて
居るね。すなはち此の二人の結びつきのです。殊にシラーはゲーテに比すれば[illegible]
[illegible]此時のゲーテは已に前にも言ひました如く Sturm und Drang の
気分を脱して居るにシラーは未だ此時が其盛りで其作ちまく Die Räuber
が即ち其代表作品であつたのですがゲーテは之を見てまづ喜ばなかつて
破壊時代を夢みて居るかと云ふ風に見[illegible]たらしいのです。
~~[illegible]~~
よく伝記者に言はれてありますが[illegible]シラーは[illegible]此時の両人の交まるが
思ふて居り エライやうな偏した[illegible]然もゲーテと云ふ人は成
は中々も勝れたる時が其[illegible]に於て[illegible]

要するに此時代のゲーテは最も個性にも幸福にもせなにも長じて
来る好手段に前期の Sturm und Drang の気は漸く脱却して
一層有意実な穏健な方向に進んで来るのです。即ち伊太利の旅
生期の行事にも見る変化を実し働して来るのです

ると言ってゐる又ゲーテは人に就き述べて ロイベーなどの作は日婦を作らと
ともなしにシラーとの交際をば態と避けてゐる僕は近頃当地に来て田舎であれ
の近傍に住んでゐるがこれは之れとの交友を拒んでもいってゐます然るに
今度偶の春シラーは直ぐ近くのJenaの大学の教授になって居
ましたから一日二十で両人おちあって話し合って之が縁であの有名な親
密の交りとなったとなってるです此後ゲーテは前に言ふ如く科学の方
面に常に解剖学を研究してゐるが是から之れを絶えず文学の方に利用しての
はシラーを知ってからです
シラーとゲーテとの交友はシラーの死するまで十余年も続きましたが
けるの作物の重なものは Xenien といふ合著の諷刺的警句集、又小歌類
の外是も著しいのは Werther に続いての ゲーテの小説に Wilhelm Meisters
~~[illegible]~~ Lehrjahre
で之れにはゲーテみづからの生涯なども
此時代の経験をとって文学の

(61)

日よく見ますと此篇はファウストに於て説述した所と似て居る即ち吾人の行路は種々の困難失敗の後を通して其の終局は神聖の域にだ ~~神聖化したもので~~ 地上の精神の方に救はるべーとなすがし日此を強調にしたものです 見えば1796年の作です 又翌年には日己名なる夫の Hermann und Dorothea とする叙事詩を書いてこれらなく緑山の叙事詩では最好のものの一ですが又ファウスト上巻に於ては独の第一の佳作であるとなって居ます 筋は単にヘルマンといふ青年が土地に ~~神佛~~ 浪流して来た Dorothea とする美しい女と恋愛しそが父が心配して容易に結婚を許さぬ 結局人をして其の女の身元を探らせると意外にも素性のよいものであったので目出度く結婚を許すこととなるだけです 其の田舎的風味などよくやかましてる風情の表れて居るのはなかなか面白いのであります ~~[illegible]~~ 其後に之論作

(62)

ありますが Faust を筆に出来ますに来て尽きるのですから此回の講義
で此の一事を少し話しません。而して80才年には此の一事は始める。其の日
もゲーテに非常な打撃で国家悼の情に堪えなかったとなるので
す。又劇に云ひ出しますがゲーテは自ヴァイマールに再び一劇場を建
設させて自らこれが施設にあたり其劇白上の理想でやって呉れ
なくこラーゲに加勢する事になるのですが、偖ゲーテみづから其座居
はあまり成功しなかった。又此劇としてもあまり見物の程度を外れし
て高い理想ばかり見せ見物を苦しめる事となり坐場が許しやって居
成功しなかったと云ふのです。併し此の国都が後年の其劇壇
詩発展の上に力あることは疑ひません。其の事で此国劇壇
国の一世紀後ヴィーランドも其の事へ寄書して来たるもの Frau von Stein
且もゲーテの理想の女であるとか女優があるとか云ふ其の頃人も呆める
ヴィマールの公子も飛出して遂に後来
三月廿二日に死去す事です

(各種の作品)

1. Faust — Goethe
2. Dr Faustus — Marlowe (1564—1593)
3. Faust and Marguerite — Boucicault (1822—1890; dramatist, Dublin)
4. Faust e Marguerite, (opera) — Gounod, etc. (1818—1893)

The Spirit [illegible]

材料、ペルシア其他古代の[illegible]即ち博士[illegible]魔法を修するもの伝説と十六世紀の独乙の小説を作ずる[illegible]とが結合して出来たもので十五世紀の前半に生れた Johann Faust といふものが Wittenberg 地方其他全独乙を旅して[illegible]と共に[illegible]しておつて Faust は[illegible]の外、Leipzig の大学で哲学を研究し[illegible]同時に魔術を研究して、魔法は当時世に信ぜられたもので又之を世に吹聴して[illegible]之は[illegible]大学の教授に[illegible]となつて[illegible]

ゲーテの Faust は前後二部に分かれてゐて、前部は1808年に出て後部は[illegible]の死ぬる前年に完成した。此の詩は殆ど六十年の間絶えず[illegible]に於て書き出した作である。前に Zueignung であるとか Vorspiel auf dem Theater であるとか Prolog im Himmel であるとかいふ三序には悪魔が Faust を魔する許を受ける由来が[illegible]。此の材料は十六世紀の独乙の伝説でファウストといふ魔術師が自己の自由を悪魔メフィストフェレスに[illegible]（随意をする約で）売つたといふ話である。Goethe より前にも此材に取つた人がある。英の戯曲家 Marlowe も Dr. Faustus を書いてゐる。又ゲーテ以後ではグーノーが Faust を Marguerite と云ふ歌劇のオペラにした。ゲーテのファウストや[illegible]は、ゲーテの前すだけの結末を書（[illegible]）[illegible]、第一部はファウストとマルガレーテの[illegible]色々[illegible]煩悶懐疑の末、[illegible]悪魔の力で此の世を[illegible]（博士）眺しやうとする[illegible]

し悪魔は呼出しえらるがさうしちゃ一層自殺せんと毒杯を手に
せんとする瞬間復活祭の当日の鐘の音が聞え其の手はたちまちに留りし
杯を落とすと悪魔が出て来て遂に永久の快楽
を与へられんに其霊魂を悪魔に捧げる約束をして此快楽主義の態
度をとつて彼は小児を殺す見るなど、いと悲惨なりしなれて遂に
獄屋に捕はれる、且ファウストはこれを助けんと欲したれど悪魔に引かれ
て彼を叫ぶ女を踏んで出でゆく。これが第一部の路となります。第二部はサ
一年数経て後のことでファウストは遂に皮際の名に改めなれ俗世の者に
並みなる業をなさんとて或る荒地開拓をなさんとせしが、業に徒ろしてゐる当日
の老人となつてゐる。ファウストはこれに対する、ファウストは此て其向上心が強く
なると共に霊魂にならねば死ぬることなくて悪魔の鎖に堕ちたれども捕へずして大空に
連れられ霊はマーガレットのある天に上るとするのです。其の模様
する彼措理は解釈の一ゆくしがたやうなれども見えませうが、向上の一念
ならばあらは極まつてしめなどいふのが帰結せらるべしなども
面白いのは其の経過で就中其第一巻即ち懐疑が快楽に入る具合及び

吾がある、此方のことを写つてをりしのであらう。此言語は夫のdoctorの女人
できます、ファウストは此其他をも一を追はずんで中に掴一人なる逃げるといつてゐる
This … sorcerer Faust an abominable beast といつて居、犬と馬とのがで一個の
魔を伴つてゐるを思ひ出して悪魔を見つけたといふ

（ここで又ゲーテ自らの精神も怪つるを代表して居るよりは主なのです）

其の精神として必らず語を入れずして[illegible]を失って妖怪の術にせんとす
居る[illegible]の極を見たすことは此所に書いてあるのです、其の他前として Charm
此の御大一也[illegible]　猶は上巻が始と似れて居る　其外所の文句

Habe nun, ach! Philosophie,
Juristerei und Medicin,
Und, leider! auch Theologie
Durchaus studiert, mit heissem Bemühn.
Da steh' ich nun, ich armer Thor!

なぞは名な句です又所にあるけファウストを仏のオペラにしたものでも[illegible]は[illegible]
ておりますから Nichts, Nichts とよくあるですが又 ワグナーの Tannhäuser
の主人公タンホイザーが死んで[illegible]醜くよる句は Zu viel, Zu viel とくの
で[illegible]も[illegible]居ますが見ますけ[illegible]よく（かいひます）

Friedrich Schiller (1759–1805) の生涯はゲーテのと反対にすこぶる困難な~~生涯を送つた~~の人です。彼は法律を学ばしめられしかし此の方の非常に嫌な事を学ぶ旨が彼を悩ませて一種の反抗心を起させし自由を重んずるの精神となつてこれが彼の一代を通じて著述の理想の所となつたのである。又法律をやめたのが嫌になつてこれも止せ後来また~~医~~医学を修めて医を学んでやりして軍医にならうとして其の業も中々悪しはなかつたらうであるが併し本心はやはり文学の方に熱して居つてクロプストック、ゲーテ、レッシング、セークスピーヤ、などの作品をも好んで読み且つ例の Sturm und Drang の気風は他の青年と同じく此の詩人の心をも強くとらへて其の結果は其の初作たる Die Räuber (1781) である。此の作は所謂自由の叫直なる青年が或る事情により家を追はれ山賊となりて世を渡りをしたが遂に自ら己の罪を悔いて其の罪悪を清めんとするまで、つまり専制に対する一の反抗、自由の叫び事を揚げたものであるので此の劇の発表せられし時は私か

67

みちびかれて田舎町の役人に見つかって捕縛せられた所が田舎町で好ーて自分の
世話になつて居る田舎娘を救ふて他人に嫁して仕舞ふので自由の人となつて
行つたのである。さて右の作はゲーテの[illegible]に比いでの人気であつた。後ワイマールに帰
つて又 Jena の歴史の教授になつたが是れもいつて居つたである。[illegible]歴史の著述
も[illegible]之れからゲーテと兼ての交際も甚だ頻繁になりである。彼れが晩年[illegible]の[illegible]をる作せ
も花ち[illegible]し時の時代であるに従つて[illegible]重たる傑作戯曲は此時代に出て
居る即ち Wallenstein's Lager, 二 Piccolomini 其三 Wallenstein's Tod の三
（二部が三部作をなす三つ続きの大作で）
其の時は三十年戦争を仕組んだもので一方歴史の流れを指てしまふ人であ
るが人目につけ方に時節しなつてあらう然して之れ時代の大なるも
見るならよりも[illegible]よくて人生の（ヴァレンシュタインの）運命であり ヴァレンシュタインといふ豪傑が
一代の歴史であるが、弾めの仕方が戦陣の光景を見せ次にピコロミニー
といふ謀殺者の子供とヴァレンシュタインの娘との恋愛などかんで[illegible]
ヴァレンシュタインは自分の野心のため又謀殺者の為に殺されるといふ筋で

さうだけ多くヴァルレンシュタインの性格は大きく（他の戯曲中でも）よく出来て居ると評するものである。次で其の Maria Stuart 即ち蘇格蘭女王とエリザベスとの二人の雄な確執の劇で、是もまた名作である。又人気ある他の劇の一つであるが、是は二人の性格が如何に同情的に出来て居る。之まで他の芝居でも一人の同感を呼ぶ女性の一人である。次は Jungfrau von Orleans 之また大成功の作で仏蘭西の Jeanne d'Arc を取り扱ったものである。其の外二作あって最後に書かれたのが Wilhelm Tell で、1804の出来である。是は死ぬ一年前に出来たのである。之れは作者の最大傑作であるといふ事は何人も否まぬ。本は人も知る通り瑞西の農民テルが自由を求めたを代表して墺太利の専制若しは其代官の専制から脱せんとする熱心を写しまた残忍暴虐の代官はテルが為に殺されて国で亡ぶを語る。其の中には個々の立派な性格を射る作もある。而して同じ自由を得る精神にして始めの Gessler とはテルとが殺死して居るとするとは深なる面白い所

つまりである、而し其の風格がわがっかに遠い、前者はいかにも若い、世に紛らず
の青年が自由を上に墨庄に反抗せんとの叫びに似てきこえて居る
の調子などがあるといかんワイルドの気味があります之れに反して之れは極め
[illegible]静な田舎風の興味が見はれて居る
後の
それつもの詩などは一幅の静な趣味の田舎の風景の絵の中です、而して
すべてをへみとして詩に自由を得るめでたさになってる。老成の趣味は塵
世故に長けたる[illegible]地[illegible]
冬そして見えてゐます、つくでも志ば死にてでかれる其
此の一つである、さて翌年ミラーは死にます。

三

ゲーテ、シラーに続いて文壇は、大なる文豪を目標として見る期に分かち得られません。即ちゲーテ、シラー時代から見て十八百二三十年ですとすれば、それから凡そ五十年後までをざっと、ハイネ時代と名付けませうか。勿論ハイネ時代とはいってもハイネの思想文学の風が勝に行はれて居るといふ訳では言いが、其の時代の最大文豪を名としたのです。即ちハイネ時代から引つゞいてはワグナー時代が見る文二三十年もあり得ます。即ち十九世紀の末二三十年来が現在の文壇といってもよいでせう。それに即ちズーダーマン、ハウプトマンのやうな人が居るのです。

即ちけふまでの中で他方を欧のには能[illegible]の風[illegible]の件が現代して、ある思想の上からは ~~[illegible]~~ Fichte (1762–1814) であるが ~~Schlegel (1770–1831)~~ Schelling であるが (1770–1831) Schlegel 兄弟 (Wilhelm von — (1767–1845) Friedrich von — 1772–1829)

などがローマンチック派の[illegible]声を揚げて居るのみならず下っては Lotze (1817–1881)
Schopenhauer (1788–1860) Hartmann (1842–)
Nietzsche (1844–1900) など[illegible]が哲学界に出て
居る。すべて政治上では十九世紀初め、[illegible]ゲーテ、シルレルまでの
表現した大の自由を叫ぶの声は一時小公爵の気味でい邦確執の
状態をもたらし夫の帝王神権説が一時はすべて小国王に[illegible]て明
「ドイツ統一」[illegible]に「国粋」心なる国民統一の思想をもって
遂に千八百七十一年に死て帝国となりが[illegible]して今まで[illegible]
此の国民的[illegible]には[illegible]的気象は認めて種々の書画的文学となりし。

~~(47) この論文の~~ (47・2)

~~むしろ否なり~~

~~此時代に純美術とは離れて思想界に大変化ありし即ち Kant~~
~~(1724、1804) 其で一哲学界に空前の偉観を呈せしむるなり 是が為め~~
~~日本などの 此の思想界にも哲学許りの大野望を与へし 了解せしは此に[illegible]~~

引つゞいて Fichte (1762、1814) Schelling [illegible] Hegel (1770、1831)

Schelling (1775-1854) Schopenhauer

其の出でなる美学の壮観を

~~異なり此時代ですこぶる若し 以上の時代は美学より外に[illegible]~~
~~の哲学を研究して思へば美術家を指導せしに~~

~~[illegible]~~

且つ 此時代の絵画界を見るに 其れも Peter von Cornelius (1783-1867)

Wilhelm Schadow (1789-1862) などは新進気鋭の独乙伊太利の

(48)(973) ~~([illegible]) [illegible] 後~~

後世の作の形式主義に流れるを嫌ひ古の真精神に立帰らんとの
極色あり、やがて英の Pre-Raphaelite の主張を生じ畫界に革新運
動を起しうるが (1816年頃) でもう既に Cornelius の如きは十九世紀の
初に絵畫史の端緒をなしたと申すべきなのです 殊に同じ流れの
ローマンチシズムです
之を音楽界に見れば更に目ざましいのは Gluck (1714～1787) 18 Bavaria
の生れで 従来近世音楽のローマンチシズムの端を開きました 其の Iphigénie en
Aulide 及び Orphée の如きオペラ歌劇に於て ワグナーの先蹤
ともいふ新派の端を開いたのでありまして は Weber (1786～1826) の
"Freischütz" の完成を見るやうになつて [illegible]ワグナーに及んだのです 其他
音楽史の最大の巨人 Beethoven (1770～1827)
もっと時代に出た モツアート

從来のシンフォニー音楽を、形式を重要視して[illegible]精神に近世の戯曲的傾向を[illegible]の中に[illegible]加へ、又彼等の S の説の中にある Pathos など此例也

十九斯くして近世の文藝は大河を決するが如き勢にて市民的情緒を導く 其の紀元の[illegible]試みて[illegible]

[illegible]一時統一を呈せしも 之より[illegible]

(75)

前に一言した如く祖国が危難に際して生じた愛国的詩文では Karl Theodor
Körner (1791–1813) Ernst Moritz Arndt (1769–1860) ~~Heinrich~~ Max von
~~von Kleist (1776–1811)~~ Friedrich ~~[illegible]~~ 又 Schenkendorf
(1783–1817) 又 Rückert (1788–1866) の III 人
を最大なるものとします 中でも Körner のは Das Schwertlied 即ち
剣の歌などがよく用いられるものです Arndt のは Was ist
des Deutschen Vaterland? 即ち独乙人の祖国は何処かといふ歌
が最も有名です
其の他 Heinrich von Kleist (1776–1811) などの Der zerbrochene Krug
即ち Brentano ~~[illegible]~~ Pitscher とは劇曲が最も有名 Jean Paul
Friedrich Richter (1763–1825) は通常 Jean Paul と呼ぶ

(76)

ばれて "Die unsichtbare Loge" (invisible lodge) と云ふ小説などある
ある Franz Grillparzer (1791–1872) はこの澳太利の劇曲家として澳
太利世界と一時絶ましく今も広くシラーなどの作と共に演ぜらるゝ人
物である "Die Ahnfrau" (The grandmother) は名を成した作
である Sappho は希臘の歴史を用ひて居る名の作 又同じく希臘の
上古に題を取れる大作三曲続きの "Das goldene Vliess"
(Golden fleece) 之れは "Der Gastfreund" "Die Argonauten"
"Medea" の三編から成って居ます 此中其 "Medea" の如きは人の
よく知るものである Ludwig Uhland (1787–1862) は独逸詩人
の一人で最も著名なる歌も多く国民的精神の同感した作の多い人で就て詩文

人中シラーに次いで最も人気ある人の一人であります。[illegible]の詩篇[illegible]
("Ich hatt einen Kameraden" "Ich bin vom Berg der
Hirtenknab 詩) 其の他 Ferdinand Freiligrath; Adalbert
von Chamisso; Nikolaus Lenau; [illegible]
Heine; Gustav [illegible]

さて Heinrich Heine (1799-1856) は Düsseldorf am Rhein [illegible] 猶太人の
子で始は商業に入る[illegible]とし[illegible] Hamburg [illegible]ことになったが非常に其
の業を嫌って[illegible]法律を学ばせ[illegible]伯井其他の大学に入って、
ハムブルグで従妹さんの[illegible]、及び其の[illegible] "Buch der Lieder" の詩に
多くの影響を与へてゐるらしい。[illegible]で[illegible]伯井で其の詩は[illegible]
して好評を[illegible]作[illegible]はローマンチックで、[illegible] Weltschmerz
を歌ったものであって、[illegible]悲劇二つを作ったが[illegible]。

~~八月の栅~~ 彼は二三年よりは Heine は Goethe を訪ふて後北海上
の荒ての~~不~~不便を避けんが為に甚だ好んで入りますく北海の辺を~~[illegible]~~
さまよふて~~[illegible]~~ „Die Nordsee" の諸詩篇は此時の紀念である
又旅行記をも出して彼の得られた~~[illegible]~~名声を日々に高めて彼の詩
が世に出でて止まなかつたのは彼の Seele でありといはれてある程に周りし~~[illegible]~~名声
は年の恐懼猿に帰を去すといつてゐる、まづバイロンの観察を試みる
佛ランス革命に判然せらしては佛ランス巴里にわたり巴里の文明に帰り住んだ
人の如く姐剣に躁がせらるゝを免かれず佛ランス巴里に至つて遂に甚だしく
疲れた。困窮、不衛生等から甚しき時期はけじめであつて „Neue
Gedichte" 及び~~[illegible]~~ „Romanzero" 詩篇の如き傑作も出でたが
七年の長い間も病床に住んでは憾むべき不遇であつた[illegible]

(79)

生き返つて、彼れの性格は一の不可解と言はずして一古[illegible]残忍とも見え
小やまく優しとも見え又単純とも見えれば[illegible]太ましくも見え
情緒的と云はれ、抒情的と叙事的文的ともを一に抱へて居ると言はれる。
又彼の詩自とかよきも帯び特色みちて居て、彼の詩の Melodie の新と
此意の感情いふことは何人にも味はれる。"Du bist wie eine
Blume" "Du schönes Fischermädchen" "Ich
weiss nicht, was soll es bedeuten" 等は人の良く
知る歌である。

(80)

右の中フヰシャーメードヘンを引いて見ると

Du schönes Fischermädchen,
Treibe den Kahn ans Land;
Komm zu mir und setze dich nieder,
Wir kosen, Hand in Hand.

Leg an mein Herz dein Köpfchen
Und fürchte dich nicht so sehr;
Vertraust du dich doch sorglos
Täglich dem wilden Meer!

Mein Herz ~~gleich~~ gleicht ganz dem Meere,
Hat Sturm und Ebb' und Flut,
Und manche schöne Perle
In seiner Tiefe ruht.

ハイネ時代の後に来つて有名なのはワグナー時代ともいふべきもので Richard Wagner (1813～1883)は独国 Opera において大成したのであるが其の Opera

は常に音楽のみをして文句をも同じく作つて即して楽曲の詩を成して居つたが為に
殊にワグナーは詩人として取扱はれて居ります。で寺のみならず十九世紀の最大詩人とも
いふ説をなす人もあります。又一方にはワグナーは音楽家として取り扱ふのが至当とも
いふ説もあります。前では詩人であるも大なる詩人とは云えないと云ふ説を取ります。
歌劇 Opera の詩るを libretto と呼びます。けリブレットーの作者として名高いものは詩人で
著名です。彼は Leipzig に生れ Dresden で音楽を学び十三才にして Odyssey を訳し
十五にして戯曲を作りしもとよりして音楽では Weber の歌劇に動かされ
又それ迄なしたが彼れ作る[illegible]又は Beethoven の交響の音楽で動かされ 1833 年に
は早くも已に Opera Composer として Die Feen の作を試みました。然し 1848 年まで此の作は
演ぜられなかつた。1839 年には Rienzi を作つて巴里に行き 1842 年まで居
つて備し遂に演ぜらるるに至らなかつた。此年にまた Dresden で演じて成功
し其の後も演ぜられ 1844 Der fliegende Holländer を書いて之は

オペラの Orchestre [illegible]

1st Violine		16
2nd Violine		14 (伴奏的ニテ第二也)
Bratsche	(tenor violin)	10
Violoncelle		8
Kontrabasse		6
Grosse Flöten	(笛)	2
Kleine Flöten		1
Hoben	(ラッパ形小笛)	2
English Horn	(同大笛)	1
Klarinetten	(ラッパ形笛)	2
Bassklarinette		1
Fagotte	(曲り笛)	2
Kontrafagotte	(大)	1
Hörner		4
Posaunen	(ヤセタラッパ形)	3
Basstuba	(大曲ラッパ形)	1
Harfen	竪琴	2
Paar Pauken	(大太鼓)	2

(82)

程既に作り上げられて居る、此所までを通例ワグナーが伊太利風楽劇の影響を脱し切らぬ時代と数へて居る、併し Tannhäuser が出た此の以前ワグナーは大冒険をして自分を立てて歩に居せしめ近世オペラの革命をやったのです。由来オペラは十六世紀の末伊太利に起ったので当時フロレンスにて古代希臘の藝術を慕ふの人々が希臘劇を復興せんとした結果出來たもので其の以後凡て言葉を強くして音楽は伴はせ然れ共其の佛が流行し後世の [illegible] の場合を指せられある然ればオペラといへば伊太利を以て代表とし、あらゆるワグナー以前のは全く此風を模するの他を得ぬのである。伊之れを旧式オペラとも呼ぶのである、即ち音楽的抒情的の方面が高く勝って劇的のには女からで甚だ劇も [illegible] ワグナーが用ひてゐた中世の伝説などは多く用ひられなかった [illegible] ワグナー曲す Legende Volkslieder

[illegible] 迄での作品即ち此風であって [illegible]

(83)

タンホイザー等であっても其筆序を記したものであり、其事の均衡を破って劇的分子をずっと補して居る音楽のみの劇にして了ったのである。されば彼みずからも之を Drama と呼ばずして Musik 即ち楽劇と称してゐる。音楽で詩を作るといふ要素が彼の抱負であって、其為に何事にも言ってあるくワグナーの大手腕なればこそ比せられない二つのものを随引に引きよせ結び合せたのであるが、常人にはいかにも技能になって一個和は難ずるものであらう。されはワグナーといっても其音楽的方面を採用して置くかならずしもと言はれて居る。即ち言語要素の表現は音楽の形式なる其が破れねばならぬのである。田舎の国民即ち噪音を用ひる必要があると言はれる。噪音とは音楽中にある大鼓、銅鑼の類で叫びの平に大きな目(1)ハーモニー(メロディー)のない音を入れて性格描写の為段々用ひるが劇の為に音楽が採用に依せられるのは例である。ナーが作中最初に之と取ってかれて戯曲的な点に勝ってゐると称せられるのである。其節は後の如くです

(84)

(廿ノ間ニタンホイザーの節(上)
其内に一人タンホイザーは死せるエリザベスの屍を運び来るそれで
終末ですが前言つて居る星の歌といふのが末の所はナシである

O du, mein holder Abendstern,
wohl grüsst' ich immer dich so gern;
vom Herzen, das sie nie verrieth,
grüsse sie, wenn sie vorbei dir zieht, —
wenn sie entschwebt dem Thal der Erden,
ein selger Engel dort zu werden!

夕暮に淋しく唄ひつゝ星を見て歌ひ出すのです。後へ/よよ有名タンホイザーを云へ
絲せしさまにタンホイザーと同じく最も屡々演ぜられる
Lohengrin が出来てローヘングリンはタンホイザーに比べても筋の単純であるが、
ゑく抒情的である。要はエルザと云ふ新人が悪巧みの夫婦のために陥せられて、エルザの
の兄を古の悪人の婦が妖術で白鳥にしてしまつて、そしてエルザが兄を殺したと云ふ
ことを国王に訴へたので裁判が始まり、此の決闘場で幕が開く、そして終局決闘で

(85)

甲胄の立派やかな騎士の方は如何なる勇士であるか誰れひとりエルザの為に闘
おうといふ人が出ない。何故ならば誰れも之れも事件を聞いては誰れか来て此姉への為に闘ふよりは
エルザは神に祈って其身を捧げることに決心した
なりかと心細げに見て居る女は失望して倒れた。其時人々皆見る遥かの川のあなたから
白鳥に引かれた小舟に乗った騎士が見えて来る。人々驚いて何物ぞと見入ると
それがローエングリーンであって実は天の騎士であらうことは知らぬが、之れでエルザの為に
闘ふ。やがて敵将フリードリッヒを倒す。エルザ[illegible]とローエングリーンとの結婚
只昼の祭の様になって騒ぐ。夫婦は二人[illegible]婚するとて[illegible]家に帰る方を更に筆を進め
よし去り夫婦とも表面はエルザ母に同情ことお見にしてまわしてローエングリーン初めの上を怪しと
言ってろくのかしエルザをして之を問はしめんとする。妃めは色を推でび[illegible]遂に女の情の
是非なく、婚儀の[illegible]とよばれやって数[illegible]思ひ切ってエルザが是非に君の
身の素性を[illegible]ローエングリーンは天子の[illegible]車来りて身を向けんとは
人界に止まるべきこととなる[illegible]とて驚き頼かったりし、さの上は是非なし
とて再び大将の前で我は天の騎士ローエングリーンなりといふことを明かすとまで[illegible]
倒れる。エルザ母の色々の陰謀の数ローエングリーンの懸命の紀なども在って、遂にローエングリーンは

再び白鳥を呼んで来して舟に乗る。悪人の方ではせう方士が再び亡さうとするので大変だで
ある、エルザは安楽して居るが忽ち天の一方から鳩が舞ひ下りて来る、之をみて
ローエングリーンは忽ち白鳥を解き放つと之は今迄に化して元の王子エルザの弟になつて
現はれて来る、悪人は驚いて倒れる、王女エルザは失望して死ぬ、ローエングリーンは鳩に舟を引
かせて再び遠にしかへて行く、王女は之を見て悲嘆する幕が静に下りるとするのです。
此の作の序曲は有名のものです、タンホイザーのものと同じである、又此の序曲は音楽会など
で演ぜられるのが度々ある、日本でも帝国劇場で始めてローエングリーンの序曲が奏された
位の演奏会が何かでやられたとする事であるが、之れ到底十分の果は揃へやうとて揃へや
しますまい。

此の後十二年許りはワグナーに取つては最も不遇の時で、其の革命的批評的な事に入
小さな方に逃走して来た世からは喝采せられなかつた、其の間に
し〔逃亡せる〕偉大な彼の最大作なる Der Ring des Nibelungen の libretto
が出来て、ならぬ年には其の序曲なる Rheingold が出来、ならぬ年には
次の第二曲 Die Walküre があまり[illegible]出来ん中間で他の作を始めて作り出す
の Tristan und Isolde 之はワグナーのロメオとジュリエット といはれるのであるが[illegible]

スルニ1861年ニ再ビ独乙ニ帰ルコトヲ許サレ ~~[illegible]~~ 好ミテBavariaノ王ニ招カレテ茲ニ其作ヲ演ズルノ機会ヲ与ヘラレ ~~[illegible]~~ 得意ノ地ニ逢遇シ、即チ1865年ミュンヘンデ右ノツリスタンを演ゼシ、又1868年ニハワグナーノ唯一ノ滑稽物ニシテ又諷刺主張ノモノタルMeistersingerガ出来テ、又再びリヒヤルトノ組ニ帰リ1869年ニ第二曲Siegfried 1874年ニ第三曲即チ終曲Götterdämmerungガ出来テ、又1876年ニハワグナー物ヲ演ズル為ノ劇場ガ ~~[illegible]~~ Bayreuthニ出来テ1882年ニハ最後ノ作タルParsifalガ出来テ翌年ガ彼ノ死デアル、三曲ヒトツ続ケノ作ノ全部ヲ演シマセン

(88) (Sturmflood)

ワグナー甚だ盛にして實に次の期即ち千八百八九十年に經亙して現代を
のですが、此の期に於ける他の大家の皆も先輩より部分は小説及戯曲、
我中戯曲でせう、而して此の期の重なる戯曲家は實に少なく、而して此の時代の重なる
る人(ここ)に至るまでの[illegible](当時は) Friedrich Hebbel (1813–1863)
Otto Ludwig (1813–1865) Gottfried Keller (1815–
1890) Paul Heyse (1830–) などがある
Fritz Reuter (1810–1874) Gustav Freytag (1816–
1895) Friedrich Spielhagen (1829–)

一小説家で[illegible]シュピールハーゲン、ハイゼは此の期を代表する[illegible]
完全な小説家としては最も名高きは世にシュピールハーゲン[illegible]
に Sturmflut 最も名高く Heyse には詩も戯曲もあるが Kinder
der Welt などの大作あり 又此の期[illegible]

Lovelace
1600 A.D.

・影響された英のRichardson等も 仏の~~[illegible]~~ Flaubert、Zola 然中Zolaの
影響大にして 此に新自然主義を産し、又 諾威のBjørnson Ibsen
盛代に入り 然中 Ibsenの努力によりて言はば Ibsen と Zola とを調合したる新
社会文学を作したりとも言はれる。又 Russian 文学は Tolstoy ~~[illegible]~~
Dostoyevsky 等を通じての ~~[illegible]~~ 影響をうけて 其の後一種の第二
の Strindberg 及び Hauptmann 等も 文学上の気運を醸成して Renaissance の文学を産して
のが即ち此期の特色であつて 文学の新しき気運を少しも残さなく方面が
刹那主義もし快楽主義で居くのは Nietzsche ~~[illegible]~~ Nietzsche (1844～1900) で
其して此期の特色は新自然主義であつて 且中に問題を大小入る即ち
一種の問題劇と自然主義との調合である。而して我が文壇近数年までありて
新しいものが入つて動揺しかけて来てゐるといはれる。併しそのものが入つては ~~[illegible]~~

はまゝ今より二新しいもので未成物を[illegible]、組合せて、けれども終らく出なく

其ば改造者とはけれどであとるか

(91) topedalark

伏部

前代と現代とつ中間に立って両方へ掛けたのは
Ernst von Wildenbruch (1845—) であって祖国と国家
した書い詩人の一人で "Lieder und Balladen" (1892) の等どもある併し其
名を知られた作は "Die Karolinger" といふ戯曲で此作は
形式の自由な大胆なものが入って中になったといはれ
る。其外作で已にズーダーマン、ハウプトマンに見える遺伝問題の一部を
示してゐるといはれる併し数年の後出来の Schwert und Hering
に解かれ作の上ではズーダーマンの影響を受けてゐるけれど
とせられる "Die Haubenlerche" (1891) の如き其例である
又小説では "Der Meister von Tanagra" などは名高の
作である。

Hermann Sudermann (1857—) に至って初めて劇曲

(92)

時の社会個人の間の衝突、互に容れざる所は伝習の道徳と新道徳との衝突を赤裸々とあらはしたものです、直截の方式は自然派であるが彼の傑作で完全な作は（小説）"Frau Sorge"（1887）で~~[illegible]~~或る意味でいふと自己を[illegible]なければ人生は立たぬ、情意献身は必ずしも人生唯一の理想でないと云ふやうな[illegible]を発表したものである、道徳は時代によつて変じて新時代には新道徳があつてよい、必ずしもニーチェ主義の道徳のみが道徳ではない、新しい人々には旧道徳は[illegible]より[illegible]意味の[illegible]ないので[illegible]けの新しい Sturm and Drang の精神であり、他の諸作も根本は之に[illegible]
[illegible]問題な三作で、是非なく彼のイプセンに求めたのです。近代劇なのは ~~[illegible]~~（小説）"Der Katzensteg"（1889）で（同じ）
又は "Die Ehre" として戯曲が出て[illegible]の上の[illegible]

(93)

舞台上の~~◯~~技術に於ても古来のコンヱンションを破つて自然派の芝居を実地に示はしたのである。彼は戯曲家としては作るものよりもむしろ解する的技術に於て一層秀でて居たとすべきやうである、次で出たのは戯曲 ~~◯~~ "Sodoms Ende" (1891) "Heimat" ~~◯~~ (1892) 又近作では "Es lebe das Leben" (1902) などが名作である。

"Fowl feather"

ズーダーマンの一代は前田の暑木ことが併し彼の作全体に於いて
自然派であってイプセニズムであって彼自は1899年に書いた "Die
drei Reiherfedern" と題する小説で破産した作
其の後にも刊行してゐる "Es lebe das Leben" などもあつたので なるか
ら或評家のいふやうにズーダーマンもに全く自然主義を見捨てて
とは言へぬであらうが見に開けの作でも自然主義の傾向を示した。
或は之を以て更にハウプトマンの模倣であるとも言ひ、併し更に
模倣とするのもあるか知れぬ、性質文より模倣としても模倣す
るは此の如きものを振りもなく又は事が今の注意を惹いて居る事を
認むるのである。而して此の作の模倣したとしはハウプトマン即ちは
之に於ても之を著者に於いて此傾向を示して居る併しハウプトマン
とても同じく　エムボリツクの作の様なものの中に自然派の作を指し

(95)

て居るのは似て居る。さて Gerhart Hauptmann (1862—)

は ~~[illegible]~~ 有名をあげて後1885年にBerlinに出て来て而して

其の年に始めて發せしは "Promethidenlos" と云ふ詩集をもつて之はバイロン

のチャイルド、ハロルドの跡を追ふてそれを模せんとする[illegible] Sturm und Drang

Sturm und Drangの氣を發しそれを以て[illegible]併し之は人の注意を呼ばなかつて而して

後1889年に始めて戯曲を出した。之の Sonnenaufgang

と云ふので彼の社会問題劇で個人と社会との衝突を描[illegible]

けて個人の精神的自由を認めてやる要求にズーダーマンなどと同様であつて

違へるズーダーマンよりも一層精神的であるといふ評はあるが

自分は自ら思ふ所[illegible]故に[illegible]イプセンなどと[illegible]の評[illegible]

少し[illegible]であつてよい。其後引いては "Das Friedensfest" (1890)

"Einsame Menschen" (1891) 其 "Weber" (1892) 以下數

(96)

作あてゞ1893年の"Hanneles Himmelfahrt"に至つて初めて[illegible] Symbolismの域に入つて、それから1896年の"Versunkene Glocke"に至つて[illegible]此作は田園劇[illegible]といはれる[illegible]であつてズーダーマンは即ち之れの跡を追うたと[illegible]いはれるのである。但し此のズーダーマンとハウプトマンとの関係が飛つては[illegible]ズーダーマンも同じ作品が出して来てすぐとよう[illegible]とちらとも[illegible]（さてハウプトマンは[illegible]年の"Fuhrmann Henschel"）それで又自然[illegible]へ帰つて文体でも其後引つゞき作はあるが同じ事である（1900年また"Schluck und Jau"は[illegible]と[illegible]の混合で[illegible]の真人作に近いものであるが不評[illegible]其他は要するに自然派式である。

（Pessimismの事、RealとIdealとの不調和を強く感ずる[illegible]一の[illegible]

時(77)

英米人は之が甚だ強く感ぜられぬナーサスの秋の沈鬱主義は亡ぼされ
パウール氏一派の指導者共通して来て居るもの之あるを答
しる。[illegible]之が東洋思想の指導者とは言へぬ、而して もう多くあるさき、沈鐘
が英米の新生面を成功せざりし ここに於ては大なる印象
ては しかし江戸っ子く 強き英米の眼識が低いかでは甚しく 如意
上に言って過ぎし観の九[illegible]が来るので、英米人は此の主人公
が今までに[illegible]張る[illegible]精神を尊視して現実を脱せる訳に
回[illegible]し得な[illegible]いのであると言ふ)

(再 この子しは十三の少女が父の死(母は既に)と共に月を指さんとしたのを幸田露伴の人は
松げん宮見氏子(不明)、で一しきりで[illegible]なって之が独生であると(標
孫少女の心持を言ふ独生へ一して之を[illegible]一して幻が消えると
えの會見院よりなって少女は死んでゐる)

(58)

(Clergyman)

ハウプトマン、ズーダーマンの外に出で来つては Anzengruber
(1839－1889)なども此の群に入るべき人かも知れぬ。彼れの作風
はむしろ末に至つて自然派にさしせまつたが古い古の脈を
承けて居る人と見てよくはないか。其の全体の調子は穏健
な[illegible]人を描いてある。既倒し其の作つてもから終年自然派の脈を
帯びて来るのはその点でも。初作は1870年の"Der Pfarrer
von Kirchfeld"で大喝采を博し、1872年の"Die
Kreuzelschreiber"で成功した[illegible]の
1877年の"Der Schand-
fleck"は彼の小説の初である。1889の"Heimgfunden"は郷
が自然派の影響を受けて纏り作中での好い出来と称せらる
ユメデサーしである(實は二つにく)

[illegible] Ansdung

又一人自然派の喜劇で名を成した人は Ludwig
Fulda (1862–) である但し深さは乏しい写実家
で作もある其の作品は "Das Recht der Frau"
(1884); "Die wilde Jagd" (1893–) 等
其他猶山ある。是この現時の劇作界でズーダーマン、ハウプ
トマンの外ではフルダを加へる其の意味は江戸の如くである
ただ実作品を作ることを意味での人気ある名家で
活躍する。

次に近代の抒情詩人としては Detlev von Liliencron (1844–)
で如き作はローマンチシズムに自然派の形
を加へた中々な作風であつたが後の作は近代の風に化した詩
作は 1883 に "Adjutantenritte und andere Gedichte"
で1889年の "Gedichte" 1891年の "Der Heidegänger und andere Gedichte"
1895年の "Neue Gedichte"
である外に歴史劇などもあるが詩の方が主である。
外には Max Halbe (1865–) は若しく自然派に伴つてゐる
新派の戯曲家、代表作は 1893年の "Die Jugend" で
及び1897年の "Mutter Erde" で
ある。
又新浪漫主義の純粋な代表者としては詩人（戯曲家）

(108)

たる Otto Erich Hartleben (1864—1905)
一つ数あつ上演げられる。(Richard Dehmel (1863—))
ハートレーベンの代表作は "Meine Verse" (1895) "Von
reifen Früchten" (1903) 等で 戯曲は 1891年の
"Angele" を手初として数多く特に名高いの "Rosenmontag"
は彼の最も成功した作で [illegible] 是は彼の ~~[illegible]~~
士官気風に反抗した主旨を見せて居る [illegible] 悲劇で
ある。デーメルは抒情詩人 "Erlösungen" (1891) を始として
1893の "Aber die Liebe" 1895の "Leben-
blätter" 1896の "Weib und Welt" 其他戯曲
もある ~~[illegible]~~ に "Lucifer" (1899) 又小説に "Zwei Menschen" 1903
等がある 此人の作風は [illegible] デカデントの [illegible] リストの [illegible]

(101)

伝奇及びデーメルは一一五、仏のナカデユトの作家、瑞典の August Strindberg

など[illegible]の化[illegible]た如[illegible] 其他 Heinz Tovote

(1864) Georg von Ompteda (1863–) Otto

Julius Bierbaum (1865–) Gustav Falke

(1853–) Hermann [illegible] (1858–)

Wilhelm Weigand (1862–) 以下の[illegible]あ

る。

(31)

更に一般に之を言ふ者の方を之をとワグナー前にあった偉なる人ではBach (1685-1750)の(Christmas Oratorio / Passion Oratorio 等の作) Handel (1685-1759)の(Messiah 等の作) Gluck (1714-1787) 等の十八世紀より十九世紀の時にかけては新気運を示す所で Haydn F. J. (1732-1809) [struck out] (Schöpfung の作) Mozart (1756-1791) Don Giovanni 等 を経て後に Beethoven (1770-1827) 又 Weber (1786-1826) Schubert (1797-1828) より Meyerbeer (1794-1864) 又 Mendelssohn (1809-1847) Schumann (1810-1856) Chopin (1810-1849) 又 Wagner と云ふ順で有名な人でワグナー以後では既に於ても多人で Humperdinck のオペラ又は其の Richard [struck out] Strauss の Symphony 又 於ける新しい方面の一派で有る。

(103)

十九世紀の佛蘭西文藝

佛蘭西と独乙とは気風が余程違ふ。人種の上から言つても古の
固より異なつて居るが、佛人の血の夢の激
しい動き易く、俊敏く、豪気で、淡泊でとりわけ
な気象から、其の文藝は自然論えず活動性を帯び、革新運動と
か流れの形式がよみは常に此れから起して来る。然るに此の十九世
紀の文藝上の大変化たりしローマンチックの運動は佛蘭西が英よ
りも独よりも後であつて、それには種々の理由がないではないが、由来の
佛のローマンチック、ヴォルテールの雄辯は其の名たる30年のHugoの
Hernaniの興りを其の国の旗火も普通にせられ、之が十分来る
に於けるワーズワース、コールリッヂ等の新詩風勃興の時と同じ

(104)

意味を持つて居るので、而も年代は二三十年後れてゐる、唯何し斯う
に後れは後れてゐるが、いよいよとなると其の打ち出し方は寧ろにも佛蘭西式
で明快鋭利である。明かにクラシシズムの影響を受けて戯場で
決戦し之を作したのである。從つて國民に佛蘭西が斯く十九世紀
初頭の決戦に後れを取つたのは其の永い伝統の存続するクラシ
シズムといふものが佛蘭西の純粋の気味、言ひかへれば一概してその佛
蘭西趣味がむしろフォーマルな論理的な優秀なもの
をより多く要求したのであつて、それがためにさうさせたのが一つ、又二つには斯
ような趣味は或意味で文藝復興に未だ實に佛蘭西を真に
本條として居るため而して他の諸國の諸民は他一般の文化に於いて
巴里文明に及ばず、而も佛國は文明全体に亙つて諸國の師宗
として他の諸國の文明を支配するを或方か昔の羅馬や

(105)

が他の諸国を凡て野蛮視にしても同じ形勢であり且つ諸国も悠よ一歩を譲つて居るため、一般の国民眼目大心から推しく文芸の新機運には動かなかつたを又三つ迄の新機運は従つて中心の傾向に於て佛蘭西も独乙も国民性能などに適したので、形式を破り一切格式を破り官の殻を破つて激越乱調に行く傾向は独乙が殊であつたらしい。言ひかへれば此の新機運は佛国的傾向と独乙的との討照であつてやがてある。其の他或程度に伴ひて各位をも加へて見ると四分は他の北欧では此の新機運の発揚に一層便利なる情が存してゐる。独乙では恰も此の如く新国運興部の陰で国民的運動と精神界の新運動とが合体して新機

（チェートン族の）

（世界が先輩をつけてに好都合であつたさうな）

(106)

運動は即ち地上の要求の確むといふ意味であつてこのゲーテ、シルレー等の文藝はやがて浪漫的文藝であつて英國ではシエークスピーヤの如きクラシカルならざる文藝の先駆者もあつたであるからドライデン、ポープ等のクラシシズムも必ずしもさう大なる鉄柵とはならなかつた。之に反して佛では如上の便宜の情がなかつた。文藝には佛は Jean Jacques Rousseau (1712-1778) の如く早くローマンチックな気運は動きそめたに拘らず之れは一時せしめる政治方面の革命が起つたが為めになつて、気味で其後の革命以来の擾乱が即ちそれである。此等の理由はあるが併し路易十四世の政府の王位と[illegible]つて大なる勢力は[illegible]動にもつかず依然ままず ルソーから後の[illegible]ユーゴーまで

まで凡五十年間を準備期として佛蘭西の文藝復興時代即ち
十九世紀に入つてゐる。

(108)

Jean Jacques Rousseau (1712-1778) と同時代の仏文学界に於ては思想界に於いては Voltaire も居り Montesquieu も居り Diderot も居って而して路々 Brunetière の評論 Reformation of Classical 等に加へ 其中にも Diderot と(評論家としての) ルソーとは評論すべき世紀ローマンチシズムの先驅する同系に屬する思想を何れがより熱烈なる力ありしかといはゞ相当地位を有するが通例は鴎子ルソーを以て其の最も大なるものとする故にはば言語でローマンチシズムの鼓動の端緒と認める。さてルソーのことは人も知っている事であり其の Confessions (懺悔録)は最も名高い(翻訳十九年)が、文藝上社会に大影響を及ぼした

(109) All is good which come out of the hand of the author of reality, all degenerate among the hands of man.

若しくは一七六二年に出来た Contrat social 即ち民約論で社會の成立は個人間の自衛防衛の契約[illegible]に基くと云ふ説之が近世社會上に大影響を及ぼしたのは誰も知つて居る通りである。此には~~[illegible]~~同年に出来たのEmileで之が後の自然を尊び人文主義の傳教を斥ける思想を導き小供の教育に寄せて最も痛切に言表したものともいふべき名高な "Tout est bien, sortant des mains de l'Auteur des choses, tout dégénère entre les mains de l'homme" のみ其の全を表はして居る。

斯やうな地位を占めるルソーを始として此の種の革命的思想が[illegible]年以後の革命[illegible]の[illegible]多く[illegible]なる~~[illegible]~~主義の人では寧ろ社會學者の方を

(110)

(Sorbonne Triumvirate は Cousin, Guizot, Villemain 也)

論じて論評家で Lamennais (1783–1854)
Benjamin Constant (1767–1830) など又比較的に
学術上之歴史方面では之の中で有名な Guizot
(1787–1874) 始め種々の人が出て又哲学者で Cousin
(1792–1867) 文学史上の勢力であって Sorbonne 即
ち大学の人としては Villemain (1790–1870) など
は人(気が出て何れも新代文芸に直接る様の学気を深
へたのでその中に大学の方面に立てる人(気は先
François René de Chateaubriand (1768–
1848) 終始せしうすりある学者の方に任して
各人で書が自然に現せり思想、其の思想、歴
史乃至宗教を総合するの思想の事を概説せん

Julie, ou La Nouvelle Héloïse.
(1760) もエミールと共に評判
(小説也)

又英の沙翁、独のゲーテ、シラーなどが盛んに製作せられて此文藝上の気運を深めたのも此時代である

抗してローマンチックの戦場に大いに加効するものがあって甚だ著名で其1802年の Le génie du Christianisme 又は其の Les Martyrs, ou le Triomphe de la religion ~~chr~~ chrétienne (1809) などが有名のものである。女には Madame de Staël の手紙文、Delphine (1802) と云ふ小説 Corinne (1807) と云ふ小説 "De l'Allemagne" と題する書で有名である

又 Pierre Jean de Béranger (~~生~~ 1780–1857) は歌ひ上まで詩的 Wine and Women の唄を節にかけ情を寄せたことが、1830 に Chansons nouvelles を出し一佛じゃなくとも有名な歌を…

(112)

であつて詩人の一人で其詩人は Alphonse Prat de Lamartine (~~1830~~ 1790-1869) は其の1820年の Méditations 一部で優に当時のローマンチック派の首領画を占めて居た一人である。

十九世紀仏蘭西文学の第二期は即ち "Mil huit cent trente" 年から凡そ十九世紀の半ばまで二三十年ほどで、所謂純粋な Romantisme 1830 の全盛期である。此期を代表する重なる文学者には Hugo、Balzac、Dumas、George Sand、Saint Beuve. などを以下に略述で要するに十九世紀前半を掩ひ仏文壇の黄金時代の一を劃する。而して此の年代に其の二月を以て言はゞ伝奇新派と旧派と戦へて雌雄を決したもので、其の戦場は巴里の Théâtre Français でユゴーの Hernani を出して戦ったのである。而して其結果は新派の勝利であって、但し茲に前来の準備期諸人の外に注目すべきは二年前即ち千八百二十八年 Charles やまと等の一種の美しい比地へ来て物語を以て文学の世論界を喚起した六十年代より直接にユゴー其他の人々を刺戟した

(114)

騒動を引き起させたものらしい。Victor Hugo (1802–1885)

みな前の諸作家も小説或は書いたが、多分、年のCromwellと云ふ劇の序文であまり知られなかつた

ことは無かつたが、其作の序文に於てロマンティシズムの主義を発表して有名になつた。而して之

以て年のクロンエル（作者にはならない作であるが）を写つて而も外に共存のホーマー、ダンテ、シェークスピア

等を推賞した。而して二年の後一八三〇年には其のHernaniをもつてテアターフランセーで演じさせた。之れは議の仕方でかゝつしもので、二月廿五

の夕は実に其の初日であつて批評家の側は凡て有名なクラシシズムの旧派であるが此等の人は之れを妨害して何を積んで上等の方の席はすつかり

占有してゐる。之に対抗して青年詩人等の新派ちふ人を集めるのは作者の書

役其の他でピットや其他の下等の方の席に夫々とつめかけた。而して

いよいよ開場となると、始めから双方から鎮坐の諸を挙げて芝居を中に

据えて相争つて、而して結局は作の面白みは分り難いとあつて上の状

態が十数日に亘つて新派の全勝で勝利に帰した。而して

此の外に其の精神其の形式に於て上の名目の争に…わざく結果

のコンヴェンショナリズムを破つて見せれ其の例として文学史によく引かれ

(115)

るのは同巻第一幕からして仏蘭西国の諺に[illegible]れてある[illegible]自由を用ひ
て旧式の格調を[illegible]と制限するといふのであるとの[illegible]（我等[illegible]）
では[illegible]程の[illegible]を[illegible]せしめ少なくも之を[illegible]響するのは[illegible]い
但し此破格の結果は従来の規則に[illegible]ちた[illegible]響を[illegible]
共に発表した[illegible]新調子が起つて来て、さてユゴーは
翌年 スコツトの跡を追ふことなく[illegible]（有名な小説）[illegible]を[illegible]ら出す
之れで仏のローマンチクの小説の基礎のなつたのは其の五九十二でローマンチク
の劇の基礎のなつたのであつて、其他勝れた小説とも数あるが小説
で Les Misérables (1862), Les Travailleurs de la mer (1866) に明晃
これのである。劇は1843年の Burgraves が失敗であつてあに[illegible]は失
望して劇[illegible]を断つて[illegible]詩では1853年の
Les Châtiments 1859年の La Légende des siècle [illegible]代表
的のみの[illegible]とせられるあるん ユゴーには劇に[illegible]初の影響

小説はスコットの影響最も大なるも、其れ詩にはバイロンの影響が最も大であつたといはるゝ。第一の詩の特色はリリカルで情調の強い、感じのある事などに現れ

~~[illegible]~~ 同じく1830年期の小説家で同じ新派の潮流に棹[illegible]しるのでは Honoré de Balzac (1799-1850) George Sand (1804-1876) Alexandre Dumas (1808-1870) 等[illegible]が最大の代表者である

Hugo の他に詩人では Comte de Vigny (1797-1863) Alfred de Musset (1810-1857) 等皆同じ潮流を汲んで Pierre-Jules-Théophile Gautier (1811-1872) までもが、併し[illegible]

十九世紀中葉を過ぎる頃からはもうすつかり此の派も衰へて了つて新しい傾向を要求して来る。ユゴーは実に自ら創した新派のやがてすたれ行く有様も見た、バイロン主義は世に飽かれて了つて、それも一時盛であつたのである、

(117)

Honoré de Balzac (1799–1850) は La Comédie humaine として集められて
仏蘭西十九世紀上半の文壇ではユーゴーに次いで最大の小説家である
最も人生の諸種の真相に通じた人と称せられる、(~~Alexandre Dumas~~)
ユーゴーを除外した凡ての此期の他の諸大家を数十合せると
(~~1830–1850~~) 初めての成功作は La peau de chagrin
(1830) (The skin of shagreen) で Eugénie Grandet,
Le père Goriot, La recherche de l'absolu (Research of absolute)
等が傑作である。彼はロマンチスト上の一人であつては
数へられてゐるが、~~此~~作家は之を以て写実に旧式で依つた当時の
ものと寧ろ意味なき作とし作風を分けて見れば寧ろ後の自
然派の胚も早や已に芽に萌してゐるといはれてゐる 但し之れは

(118)

然しもローマンチシズムの~~[illegible]~~要素にしてはまつくと云ふ曖昧、即ちでなければ
其時代々々によつても分かるので、つまりローマンチシズムといふ内には始めから
自然派的傾向も這入つて居ると云はれるのである、十九世紀の末期に
~~[illegible]~~あつては大多数の凡て新しく旧派なる者であつて
或は之を広く称してローマンチツクと言つたので後のローマンチツク
の末期の意をはユーゴーのいつてゐる新派といふ丈けの意味であつて
ラーレ又は Alexandre Dumas ~~[illegible]~~ Davy de la Pailleterie (1803-1870) 亜非利加黒人の
婦人の血統を持つて居る人である大デユーマと普通に呼ばれて居る
~~[illegible]~~ユーゴーの跡を追うて Henri [(1806)] 一九〇二 で略ぼ二十年と
同じ~~[illegible]~~行方を取つて~~[illegible]~~の彼の戯曲中の[illegible]
成功作である併し芸術的価値は二十二~~[illegible]~~年も低いとされて

(119)

The Tree musketeers
Twenty years after

ある。暫く在て彼の一層成功した歴史小説として其の最大作と称せらるるのは Monte Cristo (1846) Les Trois Mousquetaires (1844), Vingt Ans Après (1845) Olympe de Clèves (1852) 等である。彼れの作は筋を主とした風で且歴史小説として成功したのは英のスコットと同様といはねばならぬ。而して其の価値についても仏国自分の評論家はむしろ全く通俗の価値の外と云ふ風で仏文学史の著者でも例へば[illegible]は大デュマを特に一位とすることは全く止めて仮令文学史上それぞれに載せられる作者ではないとした。又同じく[illegible]の文学史目は彼を単に戯曲の方面のみで見てゐるに過ぎて外国人には尤も之に重く見らるる事がある、要するに通俗的の趣味を专らとした作風であることは既に前文我国では全く匹敵とする評であらう。モント、クリストには[illegible]律の[illegible]

あるといふ人（ある文体は彼の作者と同時に多くの下[illegible]其他の人を
産つてこれに恭れをして手を見れて出し）たとへば是等の一つは転載
せられる一国でもあらう）彼は George Sand (1804-1876)
は女性作家で本名は Amantine-Lucile-Aurore
Dupin といふ ジョージサンドは丈名で其、三大ローマンチックの[illegible]
小説家の[illegible]男、此一番努力い、彼れと当時の文学芸術家との
交はいろ／＼子供があつてミユーセ[illegible]の作や生涯に影響して
ゐるとは普通に人の知る所である。Musset、Chopin、[illegible]
Lamennais等の如き皆それである。彼れの作品は彼れの男らしい性
格が上に現はれて居る。文字体は女性らしい。[illegible]なすらしくと其れ
劇的な男らしかな所がまでてゐる。バルザックの引揮て居る所で
も一方余りにあらかん love に関る事まで云はれる。彼れの[illegible]作

(121)

の[抹消]初期のものは彼女が而も浪漫派に傾いて
盛に非結婚の論を唱へて居た時代である "Rose et Blanche"
"Indiana" などは其代表作である [抹消]後期は即ち彼女の写実期で
"Mauprat" "Spiridion" "La Comtesse de Rudolstadt"
などである バルザックをもってリアリズムとすれば[抹消]ジョージ・サンドは
アイデアリストと見なされて居る 其小説は lyrical drama といはれて居る 最後
で三大芸術家として一方の二人之等よりなるものを代表すれば
即ち彼の Gautier と共に短篇の名家と知られた Prosper Mérimée
(1803–1870) で彼れは早くにも年十七八から リアリズムに走っていたとは
あるにロマンチックの浩大的なるを避けて写実に走って 之の受けの性質
が性質はで其家のびしい[?]静の方であったらしい之等は時代を
よく見ても居る 只其の action を見び colour を見ても[?]

(122)

にローマンチックである所以は彼れは佛蘭西一流の
紀行の作家であり同時に又短篇作家で其傑作には ~~[illegible]~~ "Colomba"
"~~Arsène Guillot~~," "Carmen" (~~[illegible]~~) 等が
主なるものである。是等はローマンチック時代の小説家も論へ[illegible]
批評家もこのセントベーヴを除いて他の[illegible]

(123)

Charles Augustin Sainte-Beuve (1804–1869)は英のマシュー・アーノルドと対比せらるる近世の最大批評家です。アーノルドも始め詩を書いてみた人です。彼は初め一二の詩と小説とを作りましたが結局之等では成功せず批評家として成功した。王政主義に於てローマンチシストの一人で在来のオーソドキシカルな批評即ち宣教批評に対して新批評家を現出したものです。其は当時に personal impressionの表白とも云ふべきもので subjective でありますけれども同時に其の人の感銘の方面はむしろ多く作者も作者の心理的解剖に傾いて居ました。要約して彼の批評は彼自身の[illegible]漸次円熟して其の人の生涯を大体二期とりわけ中年時代に於て所謂 real の批評と science の批評とを合體したとりわけ必要。要約して此合體の保たなかったのは彼の史的知

Gossips of Monday
News of Monday

（就中十九世紀の晩年にあつては）作家の直接の感化と作家
識によつて無視せられる
の心理的研究とが基礎を為す、種々な文学的知識によく
統一せられたものといつてよく、而し晩年になると其の批評は寧ろ
多く作家の上に他を語ど作家のみを評價はせなくなつて
即ち一層多く歴史的に併呑せられてあつたとしれる。文学上一つ
の統一点は彼の推理には統一せられ謙虚な多く批評の方面
的のもので有るとせられる。彼の作は通例三期に属する
ものであるが、Portraits littéraires, Portraits contemporains, 等が主なる第一期
では Port Royal の歴史が第二期は Causeries du lundi 及び Nouveaux lundis 等が主なる
である。

(125)

文学を十九世紀上半の主なる現象として此期間を過ぎ後半のそれ
世紀の重なる所謂写実主義が興つたのである。即して此自
然派、実際の由来について種々の見解を重ねて已に言つて通
りであるが、此の尊なる派も大について尚居たのは
例のブルンチエールの如く前に言つた詩人 Vigny や
Gautier やの何れも此自然派の下に入れてある。が猶此らの外にも立つ
此の人の一群して居る誰なる文学のみを取り出して見る
と此れまでの方法で Charles Baudelaire
(1821－1867) が此派で Gustave Flaubert (1821－
1880) などが既に出て来る。ボードレアは其のボートなどを
訳して Fleurs du mal (1857) などが
又名である。犬のスウィンバーンが早詩を書いて Arte

(126)

otique Vale）の世界に入る（仏蘭西ではフローベールは

Madame Bovary (1856) ~~D~~ La Tentation de

Saint Antoine (1874) l'Éducation sentimentale (1870)

作一つ其特色は~~[illegible]~~平明到緻の作を書き自然派の

色を帯びて之れを異にせる~~[illegible]~~作家は ~~[illegible]~~ 劇作家（アレキサンドル

Dumas fils (1824–1895) では La Demi-Monde;

Le Fils Naturel 等の作が戯曲で他の小説も多くの劇

を批評家では文学方面に ~~[illegible]~~ Hippolyte

Adolphe Taine (1828–1893) では彼の英文学史の

外評論集もあれば Les Origines de la France

Contemporaine の大論がある一八一四年の人が主唱

する自然主義と云ふ中の解釈では ゾルヤ（1840–1902）は

フローベールは藝術は一も藝術家と一
語をなす物を有せず "L'art ne doit rien
avoir de commun avec
l'artiste" ("The art should have no-
thing in common with the artist.")
といひテーヌが英国家に適するには一は利得なし一は藝術より
nature の representation を
すと云ひ亭して作者の個性が盡くに
藝術の本元とし個人性を一切其花に埋めんとした
のが此の本元をすればこれを
"impassibilité" といひ impersonnelle
仏蘭西評家は個主義の一なり、つまり感を動かさしし
個人としての

(128)

あつの表に定めすと云ふ考を経て一も個人性の表してゐると云ふ考を
で來る結に二ル分斷治ル[illegible]外面的罷などが其の
Eliot の道徳的 ~~[illegible]~~ ethical な詩[illegible]の Tolstoi、
自然の Shaw 等 + Social なものなどが這入つて來て此の
純客觀的であつて個人の自然主義がつルニ在しいつ詩[illegible]

個人性 變つて來た

Sociale となつて來て Social pity 的 變つて來
此 Emil Zola (1840–1903) の所は[illegible]
此方面の自然主義を代表するものである（晩年の作）
Thérèse Raquin; Les Rougon-Macquart
の連續 ~~[illegible]~~ は現代の仏と性を描写して二十冊程
~~Assommoir~~
を通して一血統の遺傳の作用する所などを示せん

(129)

とられる其の中では、L'Assommoir（Trap）、Nana [illegible]
L'Oeuvre（masterpiece / work）などゆれも L'Assommoirは[illegible]いろ
の名を成した作である（其の[illegible]英訳では）（三
は酔漢を描いて飲酒問題に触れた方）の[illegible]年では
Fécondité などが[illegible]などが作品の作である
る。彼はまた読んで Flaubert 其の他 Goncourt 兄弟、Daudet 及び露の Turgenief などと共に自
然派といふものの旗幟を樹てた。
Alphonse Daudet（1840–1897）の作
Lettres de mon Moulin（風車小屋）(mill) Tartarin

(130)

de Tarascon と L'Immortel 等が有名な作である。
イムモーテル其の他代表的の作には現代の人物を取つて嘲弄諷
刺の材料としたものが多い。イムモーテルはアカデミーの会を嘲つて
ゐる。彼は要するに諷刺的材料をもつて佛國のヂッケンスと言はれ
る。Guy de Maupassant (1850-1893)
は ~~Bel Ami~~ Bel-Ami. Pierre et
Jean 等 [illegible] が最もよく知らる。後者は
Art for Art's sake 派の宣言者の如くに附き添ひして
高名等、自然派として [illegible] して彼は [illegible]
写実を主張して、可絶筆狂気して
以上の外詩人では Theodore de Banville (1823-1891)

(131)

Stéphane Mallarmé (1842-1898)

Leconte de Lisle (1820-1894) Paul Verlaine (1844-1896) などが ~~批~~評論

評論家 Edmond Scherer (1815-1889)

Emil Montégut (1826-1895) Ernest

Renan (1823-1892) ~~Pantier Passo~~ 故 Victorien

~~(1800-1881)~~ どいふ名が大切なものである。 Sardou

現代に活きて居る人で已に定評ある方の人では

(1831―) の脚本家としては其の右に出づるものなく独乙の Suder-

man、英の Pinero など一同じやうな地位にある。一層軽味

を有っているというて文化的である小説には反写実派の大の

Madame Chrysanthème を書いた Pierre Loti

(本名 Julien Viaud) (1850―) 詩人的小説家

なる François Coppée (1842—) 批評家にして小説家
◎ 而して Paul Bourget (1852—)
Anatole France (1844—) [illegible]
~~文章近時仕変に富む時代の[illegible]~~
~~中葉~~ 批評家では太だ[illegible]子の兄を[illegible]
而して Ferdinand Brunetière (1849—) Jules ◎
Lemaître (1853—) (批評家にして劇作家なる)
◎小説家ではゾラの弟子 Hugo J. K. Huysmans
(1848—) 劇作家としては Edmond Rostand (1868—)
などがある 其の外 [illegible] ◎ 新代 [illegible] Symbolists ◎の
一群になる 之は新に筆けた マラールメ、ヴァルレーン等を首魁

とするのじや　ならう自然から在来の自然主義~~の~~
などに反抗しようと云ふ運動が起つて来て此中詩に於て新運動が起つて来
ことなれば即ちサンボリズムで又 Décadent と云ふ事も同じやうな意味を持す
其の特色は外面的な事を離れて内部的な心持を描くが象徴派の主張的で~~[illegible]~~
~~[illegible]~~暗示で (Le Ligernerie et l'obscurité) ある~~[illegible]~~
アーとは二人の中ではマラルメよりもヴェルレーヌの方が一層詩人的
であつたと云はれる　其の他此の派に属する詩人では Gustave
Kahn (1859—) Jean
Moréas (1856—) Henri de Régnier (1864—) Jules Laforgue (1860–1889)
Emile Verhaeren (1855—) Viélé-Griffin
(1864—) Albert Samain (1859–1900) Francis
~~Fernand Gregh (1873—)~~

(134)

などである。
仏国の近代オペラは殆ど其の影響を受けて 初た當時の大家 Berlioz (1803–1869) あれども
其の外大なるものは小さい其の初毛は現れない
Gounod (1818–1893) で其の作では 初作が1851年の
初めて出したる
Sapho でも成功はしなかったが 夫の Faust で libretto は
他人の筆 である 1869年の Romeo et Juliette
がこれである。グノーの感化の下に ある など云ふ者は
Ambroise Thomas (1811–1896) で其の傑作は Mignon で
あるがトーマよりも名高いのはワグナーの感化の下にあって
Bizet (1838–1875) で其の傑作はメリメーの小説が

小節を取つて Carmen、ビゼーのオペラ中で人気あるもの一
つである。下つては Sigurd の作者 Reyer、ゾラの小説をオペラにし
た Bruneau 等もある。

佛蘭西近世の絵畫史（十九世紀）なります
仏文学と同じ形勢を辿ります。十八世紀の末 Jacques Louis
David (1748-1825) が十四八世紀までの古典主義の旧派の中堅
派を代表しての最大の名です。ダヴィッド派と反動的に起つて來た（浪漫派の）代表者です。それに対して起つて來た其の派の代表者が Jean
Louis Géricault (1791-1824) 及び Eugène
Delacroix (1798-1863) などで、強烈な感情を
表わし写実的な筆を写したのです。ついで現代の文學的
て現代の祖と称せられるのは Alexandre-Gabriel
Decamps (1803-1860) で好んで東方の景色を描き又明暗を巧に
使ふを得たのでありました。強烈な色彩を用ひてあったのに古風で而
も一派を樹てたのは Jean-Auguste-Dominique

Ingres (1780–1867) であるが只ダヰー派の清代・新古典派を
過ぎ其他 Horace Vernet (1789–1863) Paul
Delaroche (1797–1856) Madame
Louise Elizabeth Vigée Le Brun
(1755–1842) [illegible] 古典派の特徴となるでなく去らなか
という派は旧派の方での名であり 新派には Théodore Rousseau
(1812–1867) Camille Corot (1796–
1875) Jean François Millet (1815–1875)
等あって仏の学を畫の方面でデカルトの様な大成をして真の仏
畫の特質を示した ルソーは自然を自然として描き カロー
は自然を田園の[illegible]情として描き ミレーは田園及び農夫を描いて

其労作の論文に於て精神を現はす今し此等の作家が史條を思ふとか自然を写実に写すとかしない点で已に後の象徴の端緒をなし現今のはむしろ夢中にもロローの画風は未来にクラシシズムの訳をあててつまりクラシシズムはローマンチシズム、リアリズムを折て一脱して独特の[illegible]をなはず。

(139)

ルソー、コロー、ミレー等の外には Dupré (1812-1889) Daubigny (1817-1878)
等みな同じ事ら自然を描くを中心として親しく画がいた事で而して画
すら此等近代景色画家が主義とする所は自然を自然として把住したに
等の様にして細微な所にあつて。而して真に自然を写すは写生に基
色を写すものと進んで ミレーの如く已に大に人物にも重きを置いて而も
古派の如く シアトリカルな景の体を描かず寧ろ日常平凡卑近の事
に眼を向けて即ち師とせず人を描くの総田地も我しれぬのミレーの外
には Courbet (1819-1877) の如き写実家、更に其写景色画にてと人物
に関すると論なく自然を選んで之れを描くを主とした以前の様に紙で
ある、此等に至つては一の自然のままに描くといふ方針が主になつて
自から進んで之の自然の解釈を加へず我を離れる
画的の自然よりも我が画家の感ぜし即ち印象を主として
之れを

画を描いて自然を写すと共に所謂印象派が生じ之に属し其技巧の方面に於て全然別生面を開きーとして之れを試みし人々は即ち[illegible]として[illegible] Jules Bastien Lepage (1848–1884) 其の先駆の人は即ち Edward Manet (1833–1883) Edgard Degas (1834–) Claude Monet (1840–) などである是等の人々は主として外光の画法で[illegible]の彩色法に其の影響を[illegible]し従来は土の中の[illegible]であつて[illegible]も[illegible]の中の[illegible]すると[illegible]ければ[illegible]色を使わずして外光派が所謂 Impressionist となり Pointilliste とも[illegible]の色彩を精確にせんとし[illegible]の[illegible]、外に外光派となつて[illegible]と[illegible]人物などを描ける[illegible]の人々には ~~Paul Laurens (1838–)~~ Carolus Duran ~~(1837–)~~ などあり Gustave ~~[illegible]~~ Puvis de

(161)

Chavannes (1824–1898) の壁装飾画に於ける Gustave Moreau (1826–1898)
の伝説画に於けるいづれもそれぞれの部面で技法を開拓した一方 空想的な
の新派印象派に就ては前に言ってモネー、デガーの外
Pissarro, Renoir, Raffaëlli など大家が出て来ていて之
に次いで新派 Neo-impressionism 派を形つくってこれが 史画
で J.P. Laurens、戦画で Detaille,
其他 Carolus-Duran, Cormon, Bonnat,
Humbert, Benjamin Constant などみな人であり、

此に彫刻について一言せんに思ふすこし佛の近代ならびによく其概略を示す。
十八世紀の末からかけてクラシシズムの形の控へ目な滑かな彫刻は他方にロマンチシズムから
個人性の他向に向って、末 時世の
十八世紀のクラシシズムを以て常に引かし 人は

(142)

伊太利の Antonio Canova (1757–1823) で下つてはすぐにも
知られてゐるデンマークの Bertel Thorwaldsen (1770–1844)
などが同じ流派を承けて居る（トルワルゼンの作は附けニマーの芸術史にあり）
けのやうにこれが佛蘭西の中に及ばず論なれば[illegible]のが次に反対の作
風が起つてきたので其佛西では是れが François Rude (1784–1855) Pierre Jean
David d'Angers ([illegible] 1788–1856) Antoine Louis Barye (1796–1875)
写の写実的傾向とを更に Jean Baptiste Carpeaux (1827–1875)
~~[illegible]~~ Henri Chapu (作例) (1833–1891) [illegible]
[illegible] Jean-Alex Joseph Falguière (1831–1890)
~~[illegible]~~ [illegible] Paul Dubois (1829–) [illegible]（作は[illegible]）
~~[illegible]~~ 伊太利の派を承けて[illegible]世（作例）其を経て近くは
Auguste [illegible] Rodin (1840–)（作例）[illegible]

(143)

に個人性の発揮を忘れし粗力を用いて毫も力なく
彫刻と塑像とを作りて其他にも作例を示す Puech Bartlett など
の作品て作風が只似たる程の外は未だしといへども実に実に他国の見
えたる。二人とも只々其形を写し出し感情を出さんと力めて居る作である。

(144)

種々なる古式の七宝様式の塔りする代術する

欧羅巴の十九世紀の建築は何かの形を取り出して言ふべきを見出来ない、之は他の美術に比すると普通が目立たない、建築には室内装飾もついて来、殊に近代の一般向は西洋の外部の工風にはしこれらであるが、十九世紀の装飾術はこのアトリエの前も手行われて居りびき即ち近く革命のウヰリアム・モーリス氏、等イギリスのアール・ヌーヴォー式などが最も新しい運動であり、併しこれを建築全体の上から言ふと分類区別なすべきに至る十九世紀の純粋なり建築に於ても古代仏蘭西等の様式、十九世紀を通して過渡期と見れる十八世紀に於ても著しかったのは…ので之は大のルイ十四世紀を継えて建築は內は装飾の式であり、飾りを限りに施して華麗を尽した式であるのを自由に使って大の仏のヴェルセイユ宮殿の如きはその比ても推した国…の宮殿などで見られる係しこれは普通に出来ない式とは見られて居らぬそれが十九世紀時代

△衰みあり

み変じてローマン式となつて雄健の趣を加へて来て、それに無論時代の精神も手伝つて
ってそれを以て意匠を芸術子のが差である。近りでは其の創つき霊動して希臘の
古典式に再帰して Hellenistic 式が起つて来て、それから十九世紀の始め三
十年である。然るに独りにも之に行はれ、それから文学方面のことも
之に因つて行はれて、近ぐで於ては其れがローマンチシズムで中古に返つて
中古式になつて即ち Romanesque から Gothic 式となつて来て、此二七百
はれつづいて雄壮剛健の気風を表はし建築である。クラシシズム
の代表建築家は北の独 Friedrich Schinkel (1781
—1841) などであつて、此すゴシック風の建築とが起つた
世建築界の注目すべき同一現象である。要するに此は近代であるとは
此の二つ並に異する所ならされしてこの式即ち伊太利式の
ロココなどの風は採であるの華麗な式と此等の折衷である
而して引いて早々も近では此の折衷式にも随いて或

帝王式建築の代表者はナポレオンの建築師 Charles Percier (1764—1838) などである

(146)

はルネッサンスに戻り或はクラシシズムに還り或はゴシックに戻ると云ふ形勢である。其の他最近時の一段気として建築家の注目して居るのは一般人が呼んで建築界の自然派写実派などいふもので、其の意味は美を実用との調和に求めるとしつつあるもので、之は近世の社会状態の変化よりきたる同等の壓迫力で、之れと調和しなければ美も安全に完全には成立し難いやうになつてゐるのである。又昔は寺とか宮殿とかいふものが建築界の中心であつたのが今では大工場とか停車場とか大銀行とか大旅館とかいふやうなものが重要の地位を占めて来たので其の利用といふ観念が特に其の中に加入して之と調和して来るのであらう。其の他前にもいつた如く室内装飾の発達と共に色の配合など自由に建築に用ひられるやうになつて来たのである。(之で近年は済んでゐる)

(151)

仏国にては十八世紀の末のルイ十四世十五世の頃に絵画は俗悪に
堕落したのを嫌って行ったWatteau (1684–1721)にて古風
絵に描かず堕落したるが十八世紀の末、これの反動に
かけて革命を起こし其の先鋒たり Jacques Louis David
(1748–1825)で其の作風は所謂クラシシズムであって、強烈な
ものだ厳粛なるものをもたらしたのである。これが更に反動を呼んで写実
写実的自然的作となって来た。次いで近世に於てはセリーール以下
なる(旧稿より)、又影響を受けては英国に一層甚だしいのであ
独立しようとしての試みはボーニスポワーにある
るが、就かでも更に Constable
(1776–1837) Turner (1775–1851)は既に色彩に於ては、

絵画では英国では一般に Claude が無論此術は古く油絵なども古くからあったが
あつたが之を生かして画中の生気あらしめたのは英国で十九世紀末の
John Constable とか Thomas Girtin とかいふ人々が地図の様な絵から
景色画の方へ引上げる端を開いて夫の Turner の初期の画に
至つて遂に其極に達したなり　Turner は油絵にも大に水彩の名
を此等の人々の許に得たり。近頃は Pre-Raphaelite Brotherhood で
P.R.B. と呼ばれて居る。~~[illegible]~~ 其三人としては
Constable (1776-1837) Turner (　) D. Rossetti (　)
) Holman Hunt (　) Millais (　)

○ Burne-Jones (　　) Morris (　　)

Watts (　　) Whistler (　　) 以上英国ノ (二[illegible])

独ニテハ ~~[illegible]~~ Menzel (　　) Boecklin (　　)

Lenbach 以上 [illegible]